

Vienna(1869) Musikvereinssaal Stuttgart(1956) Liederhalle Berlin(1963) Philharmonie Köln(1986) Philharmonie

コンサートホールの代表的平面形



コンサートホールの断面形

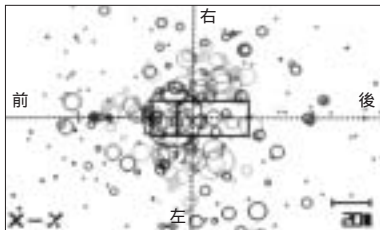


Boston, Symphony Hall(1900)
シューボックスホール特有の豊かな響きの愛好者は多いです。

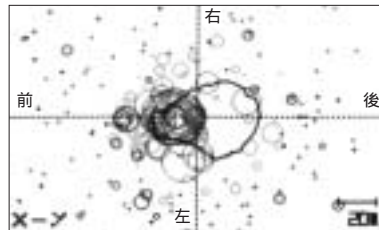


Vienna, Staatsoper(1869, rebuilt in 1955)
馬蹄形のオペラ劇場です。戦争で焼けましたが、以前と同じ形に再建されました。

コンサートホールと劇場の内観



いろいろな方向から到来する反射音にとり囲まれているので、音に浸っているような豊かな響きが得られます。



レベルの大きい反射音が主に前方から到来しているので、クリアで迫力のある響きになります。

シューボックス型(左)と扇形ホール(右)の反射音解析例



反射音が4つのマイクを通過する時間差を検出して到来方向を測定できます。上の解析例もこれで測定したものです。



マネキンのようなですが、耳の位置にマイクが仕込まれているれっきとした測定器です。でも夜見ると恐いです。

4chマイク(左)とダミーヘッドマイク(右)

SYUNKEN 駿建

2000.1 Vol.27 No.4 学期末号
日本大学理工学部 建築学科
短期大学部 建設学科建築コース

コンサートホールの響きは、音がホールの壁や天井に反射されることによってつくられるので、ホールの形の個性がそのまま響きの個性になります。平面形では、長方形で靴箱のような形をしているシューボックス型(1)、客席が扇のように未広がりになっている扇形ホール(2)、ギリシャの円形劇場のようにステージを客席が取り囲んでいるアリーナ型(3 & 4)、その他馬の蹄の形をした馬蹄形ホールなどいろいろな形があります。断面形にもさまざまな個性的な形があります。

演奏家は、コンサートホールにあわせて微妙に弾き方を変えられているとされています。楽器だけでなく、ホールの響きをうまく使って音を紡ぎ出しているのです。ですから、コンサートホール自体、最大の楽器であるといえるでしょう。ホールの響きの設計は楽器を作ることにとてもよく似ていて、そこには響きの秘密を解き明かして設計に反映させていく面白さと、完成後のホールで音楽が豊かに鳴り響いていることを想像する楽しさがあります。

このように、コンサートホールの響きなど、建築空間の音環境を扱う分野を“建築音響学”といいます。

(短大助手・羽根敏樹)

デザイン基礎 建築設計等科目に関する調査結果 (第2報)

前回の『駿建』で報告したアンケート結果に次いで、

今回は記述式設問に対する回答結果を報告いたします。

全文の掲載は難しいので、各事務担当の方々に、各クラスの特徴をまとめていただきました。

各学年とも、前期終了間近にアンケートを行っているため、後期授業は対象とされていません。

1年 (デザイン基礎 , デザイン基礎)

● 1組

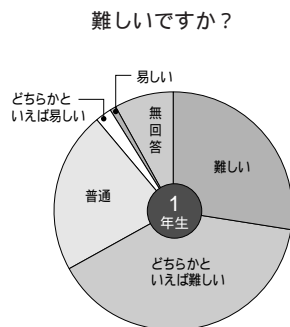
《具体的に何が難しいか》という問いに対して、「イメージを具体的に表現すること」という意見が多く、「アイデアを出すこと・まとめること。他教科との時間の釣合」等の意見もあった。

《アルバイトの経験》は大工、内装、工務店、設計事務所、模型制作会社、建築士受験学校等があった。

《課題について》は、「多い」「抽象的で難しい」等の意見が多く、「具体的に説明してほしい」という意見があった。また、「宿題が多い」「美術を勉強しに来たわけじゃないのでつらい」「時間が足りない」「制限をつけないでほしい」「5～6課題からの選択制がよい」「幅が広すぎる」「先生によって違うので戸惑う」「イメージしたものをつくるのは楽しい」「形になるので充実感がある」「お金がかかる」等の意見があった。

《班分け》については、「先生を選べるようにしてほしい」という意見が最も多く、「1課題でいろいろな先生の意見を聞きたい」「生徒が先生を細かく評価できるようにしてほしい」「少人数制にしてほしい」「ランダムにしてほしい」等の意見があった。

《講評会に参加しない理由》は、「人のつくったものに興味はない」等の意見があった。



《講評会の感想》は、「勉強になる」「いい刺激になる」「面白い」等の意見が多く、「人が多過ぎて見えない」「邪魔する人はこないでほしい」「プレゼンテーションに慣れるよい機会」「自分の欠点がよくわかる」等の意見があった。「うるさくて話が聞こえない」とい

う意見も多かった。

《採点結果の不满》は、「先生によって違いすぎる」という意見が最も多く、「評価の基準がわからない」「独自の解釈をされる」「先生ごとの評価の平均がよい」「厳しい」「返却時にコメントしてほしい」等の意見があった。

《何に興味を持ったか》は、「線を描く」「立体図を描く」「Self Portrait」「立体構成の表現」「My Gift for You」、各課題それぞれに興味を持っている。また、「自分の創り出すものにコンセプトを与えること」「デザインへの姿勢」「ものをつくり出す過程の楽しさ」「自分の作品をプレゼンテーションすること」「イメージ・言葉を形にすること」「デザインの奥深さ」等の意見があった。

《感想》には、「自分の考えを持ち、発想を蓄えることの大切さを学んだ」「だんだんと楽しくなってきた」「建築を勉強している実感がわく」「つらかったけどためになった」「やりがいがあった」「導入の授業としてよい」「実際に創るのがよい」「生活の中に芸術が溶け込んでいるのがうれしい」「わからないことばかりであった」「美術学校のように大変だった」「学校で制作する時間と場所がほしい」「抽象的で発想が難しかった」「先生の「私の気に入るものをつくれればいいんだ」には驚いた」等の意見があった。(文責：佐藤直樹)

● 2組

《課題》

大学入学以前の教育においては体験したことがないような課題の与えられ方であるようで、とまどいが多いことがアンケート集計からも出ているが、それを裏付ける記述も多い。

最も多いものは、「出される課題が抽象的すぎて自由にやれる反面、考えるのが難しい」「どのようにつくったらいいのかうまく考えられない」「なにをつくってもよいといわれると、よくわからない、もっと具体的な説明がほしい」という意見である。また、とまどいの中にはデザイン課題というきわめて抽象的な内容の提出方法

に問題があるとする者もあり、「課題説明を聞いてもぴんとこない」「毎回わけのわからない課題が多いので困っている」といった切実な訴えがあり、教示方についても「先生によって、課題内容の説明が違って、困る」「細かい説明がないので、わからず、やってきても次の授業でひっくりかえされてしまう　こんなことなら、最初からちゃんと指示をしておいてほしい」といった記述がみられる。

ただし、現行の課題提示を肯定的にとらえている者もあり、「簡単そうな課題でもとても奥が深いので、考える力がつく」「とても難しいが、やりがいがある」などのように、抽象的な課題において、それをどう答えていくかといった力量が試されていると理解する者もある。

《評価》

デザインは、建築設計科目より評価に関して難しい面があるのは否めないであろう。アンケート集計においても、不満が他学年より多いのはこのためであると推測される。これを率直に述べているものとして、「担当教員により評価が違いすぎる」「教員の感性に左右される」「教員の好みで左右されるのは不満」といった者、さらには「名前を選んでいるような気がするので、匿名でやってほしい」という評価者不信を具体的に表す者もいる。とくに、教員間の評価基準については、「他のクラスと採点基準が違いすぎる」、さらに「他の曜日のクラス（1年1組のこと）との差がありすぎる」としたものが自由記述であるものの、20件近くあったことは特筆すべきことであろう。「自分の先生が、なにを求めているのかわからない」という記述も多く、前項の課題提示との関連において、担当教員が求めているものをできるだけつくろうとするものの、結局それがわからないまま提出し、評価も芳しくないものがつくといったジレンマに陥る者が少なからずいることがわかる。

これに関する提言として、「デザインのようなものは、人によってとらえ方が違うので、よし悪しでないと思う

作品を一人の人間だけに決められるのはよいとは思わない」「一人の先生だけで、S～Cなどの評価をされるのは嫌だ。時間をかけてでもいいので、他の先生全員とかで評価してほしい」など、複数教員による評価を求めたものがいくつかあった。

《講評会》

他人、他クラスの作品を見、それがどのように評価されているのかを知る機会となる講評会については、アンケート集計では学年が上がるにつれて積極的に参加する者とそうでない者が二極化する傾向があることが述べられているが、自由記述から、すでに前期の終わった段階の1年生においてもこの傾向は見られる。積極的なほうでは、「他の人の作品が見られて参考になる。刺激にな

る」「自分が思いつかなかったことが見える」「すばらしい作品を多く見られることは自分にプラスになる」等がある。さらに、講評会をもっと大きな位置づけとす

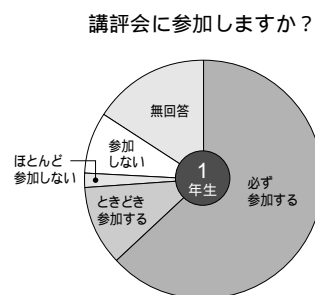
ることを望むような「とてもよい。決まった作品だけでなく、すべてについて講評したほうがいい」「もっと他の学生と意見交流したい」「もっと専門的な人に見てもらいたい」というものがある。

否定的な意見では、「声が聞こえない　人が多く、作品が見えない」といった会場の物理的な不具合を指摘する者、「参考になることもあるが、退屈に感じてしまう」のように進行に関するもの、「プレゼンるとき、先生は個人に何か言っているのだが、他人が見ていても内容がまったくわからない」「先生同士が盛り上がっていて、生徒はかやの外」のように、少人数においての『うち受け』的な傾向があることなどが指摘されている。

いずれにしても、学生にとってはさまざまな意味で刺激となっているようである。それらを挙げると、「今まで、みんなの前でしゃべることはほとんどなかったので、最初は緊張したが、だんだん慣れてきた」というように、自身の鍛錬の場として有効であったことを述べた者がいる反面、「先生の鋭い意見が聞いてよいが、ショックを受ける」「みんなすごい人だと思い、自信をなくしてしまう」のように、事後、何らかのフォローが必要と思われる者も散見された。

アンケートでは、かなり本音が書かれているようで、教員間においても話題となっている。何らかのかたちで、今後の講義、教示、課題設定や評価に生かしていきたいと考えている。

(文責：八藤後 猛)



2年(建築設計, 建築設計)

● 1組

過去1年半の授業の《感想》には、以下のようなものがあつた。

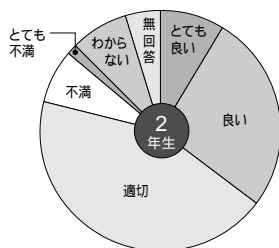
- ・デザイン基礎は空間的な考え方を身につけるのに役立った。
- ・1年では感性を高める課題が多かったが、技術面(図面の描き方、プレゼンテーションの方法、模型のつくり方など)をもっと詳しく教えてほしい。
- ・班の人数が多すぎる。
- ・デザイン基礎では思い切り自分の気持ちを作品に表現

できたが、設計では敷地や法律などに規制されてやりにくく、その中で最大限に自分の思いを表現できるように練習したい。

- ・現実味を帯びるほど考慮すべきことが増え、自分の勉強不足を痛感させられる。
- ・2年になって、1年でやったことが基礎の基礎であることを痛感した。
- ・住宅などリアリティーがあるものを設計することは、デザイン基礎で学んだことと同じであった。
- ・2年になって授業が面白くなってきた。
- ・1年から2年につながっていく考え方が掴めない。
- ・段階的な授業内容なので、少しずついろいろなことが身につけて楽しい。
- ・照明の課題のような課題を増やしてほしい。
- ・前川邸のコピー課題は大変であったが、図面を描くことの大切さが学べた。
- ・1つの課題に対する期間が短い。講評会だけで終わらずに、1人1人に何が足りなかったかを指導してほしい。
- ・1週間の過ごし方が課題によって左右されるので、もう少しゆとりをもってやりたかった。
- ・知識不足であるため、やりたいことができないので、建築雑誌などを定期的に見てゆきたい。
- ・個性的な先生に指導されたり班の人たちの作品を見たりして、視野が広がった。
- ・デザイン性だけで評価する採点基準に疑問がある。
- ・模型にかかるお金が多い。
- ・今の段階では基礎的なことは身につけていない。

その他、《課題》については、「何を求められているかわからない」「自分の抽象的なイメージや考えを図面や模型に表現することが難しい」「自分のつくりたいものを自由につくりたい」。《指導》については、「納得・理解できる指導をしてほしい」「考えていることを活かしながらアドバイスしてほしい」「コメントをつけて返却してほしい」「先生の考え方により先生を選べるようにしてほしい」「自分に合った先生の指導を受けたい」「任意の先生に意見が聞けるとよい」。《評価》については、「自分の思っているほど結果が出ない」「個人の美的センスは違うので評価することはおかしい」

段階制をどう思いますか？



「先生によって違う」

その他、「他の科目の課題を減らしてほしい」などの意見があった。

(文責：佐藤慎也)

- 2組
建築史を専門にして

いる私は、アンケート結果を読むのは不得意です。なぜかということ、個別情報をバラバラにして、集計しても実体はつかめないのではないかと危惧するからです。そのため、アンケートの中で気に留めたことを列記して紹介するにとどめます。

《どこが難しいですか》

- ・先生との意見の違いを否定されることが多い。
- ・建築は芸術である。毎回の課題で僕は自分の感性を出して、それを形にするつもりでやっている。普段からの緊張感が必要であり、このことはとても苦しいことです。苦しくても頑張っているつもりですが。

《課題について感じる事》

- ・他の授業の課題と重なるのは考えてほしい。
- ・良い考えが思いついたときはうまくいくが、思い浮かばないときは、適当にやってしまう。考える時間が少ないのではないか。
- ・「具体的に建つことを想定するのか」「実際に建たなくてもよいということを前提にするのか」、悩むことが多い。
- ・設計中心の生活を送っているが精神的にも肉体的にも痛めつけられる。もっと時間が必要なのではないか。
- ・一生懸命やっているが、最後に妥協してしまう。設計のときにはもっと環境をよくしてほしい。
- ・自分のためだと思って頑張っているが、自分をさらけ出し、成績になるわけだから、大変であるが、しょうがないことだと思う。

《班分けについての意見》

- ・生徒の中に先生と合わなくて、悩んでいる人もいる。
- ・固定化は望ましくない。よく教えてくれない先生がいる
- ・班によって終了時間や課題の量が違いすぎる。

《講評会についての意見》

- ・各先生の意見が異なっていて面白い。他5名。
- ・もっと広い場所でやってほしい。あのような狭い場所では来たい人も行けない。
- ・自分で思いつかないことがあって面白い。他2名。
- ・他の大学とも共同でやってくるとよい。
- ・先生たちが自分の意見を通そうと思って精一杯という感じがする。
- ・会場が狭いし、発表が先生に向かって行われていてつまらない。
- ・もっと時間をとってほしい。自分の担当の先生だけがしゃべって、他の先生の意見が聞けなかった。普段の講義よりも勉強になります。
- ・課題の内容が濃いだけに、発表が多いと後半に両者の疲れがみえる。人数をもっと厳密に絞るか、講評者側で事前に内覧してから講評会を始めるとよいのではないか。

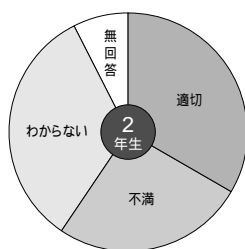
《評価に関する意見》

- ・前期と後期の先生の言うことが異なっている。どんな基準があるのか。
- ・先生によって評価が違いすぎる。
- ・先生によって好みがあるのはわかりますが、明らかに狙いすぎの作品をベタ褒めする先生がいる。そういう作品は、講評会のときに他の先生がコメントしかねているのが手に取るようにわかります。
- ・先生の評価がそのまま、設計の成績になるのは不満。評価基準が先生によって違うのだから、偏差値のように調整する必要があるのでは。
- ・生徒と先生の感性は違うのだから、評価をつけないでほしい。

以上、われわれにとって気になる発言を取り上げたが、これらの問題については、今後も授業の事務担当助手の立場から真摯に受け止めていきたい。

(文責：重枝 豊)

採点結果は適切ですか？



- ・先生によって好みも条件も異なり戸惑うが、いろいろな先生がいることにより自分の個性も形成されるので、先生のやりたいようにしてもらえればよい。
- ・一通りのことはできるようになって、それなりの評価をもらうが、そこから1歩抜け出すことができない。
- ・建築に携わっていく上で、建築学科の勉強だけでいいのか不安。
- ・何が正しく、何が間違っているかがはっきりしていない難しい科目。
- ・学校で図面を描くことができないのはまずい。
- ・評価方法を変えるべき。
- ・設計に時間がかかりすぎて、他のやりたいことができない。
- ・何を学ばせたいのかわからなかった。自分で学ぶ意思を持たないと、できない科目だと思う。

《前期で必修としての建築設計が終了することに対する意見》は、以下のようなものがあった。

- ・不安を感じるが、学んだことはとても多かった。
- ・意味がなかった。つらいだけ。設計は自分に向いていないと感じているので、やっと終わり、ほっとしている。
- ・実際に建物を建てられる気がしない。
- ・やっと今頃になって、やる気が出てきた。
- ・基本的なことはほとんどできていない気がする。これで一級建築士試験に対応できるのか不安である。
- ・後期から選択になるのは、進み道を決める上でよい。
- ・さまざまな施設の設計を行い、いろいろな考え方を学ぶことができた。
- ・これから学んでゆかなければならぬことの多さに圧倒される。

その他、《採点》については、「基準がわからない」「先生の好みに影響する」「インパクトがあるだけの変な作品がよい評価となっている」「図面、模型、提案など、細かく採点して、総合点として示してほしい」「どこを改善すれば評価がよくなるのか、具体的に示してほしい」「全ての先生の評価を総合してほしい」などの意見があった。

(文責：佐藤慎也)

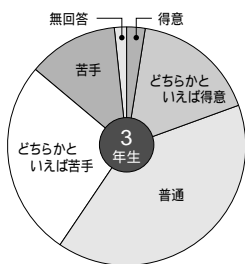
3年（建築設計製図，設計演習）

● 1組

過去2年間の体験を踏まえた、《建築設計教育に関する意見》には、以下のようなものがあった。

- ・1年の前期から、もっとデザイン的な授業を行ったほうがよい。
- ・1年で身につけた透視図の描き方などの基礎的なことが、2年からの実際の設計でうまく活用できなかった。
- ・図面の描き方をもっと教えてほしい。
- ・設計の講義（図面の描き方、模型の作り方など）をやしてほしい。
- ・CADを早くから教えてほしい。
- ・建築の専門家と1対1で話すことは、非常に勉強になると感じた。
- ・指導の先生の考え方が異なるので、成績を考えると、その先生に合わせてしまって自分の設計ができない。先生の考え方の違いなどによって評価が変わるのは理不尽である。

デザイン基礎、設計等の科目は得意ですか？



● 2組

3年2組のアンケート回答数は70名で、ほぼ半数の人からの回答を得た。内訳は、男子43名、女子17名、不明10名である。3年生は、前期で必修科目としての建築設計を終了する学年であることから、アンケート結果が注目されていた。

記述式による質問形式については、すでに公表されているので、ここでは、このクラスの全体的な傾向についてまとめてみたい。

《デザイン基礎・設計製図のどこが難しいか》という

質問に対しては、頭の中での構想と形態が結びつかないことを指摘する人が圧倒的に多い。このことは、おそらく、全学年を通じて共通する傾向であろう。

《課題について感じる

こと》では、「先生によっては意見を押し付けられる」という意見が目立った。こうした意見は、高学年特有のものともいえる。マン・ツウ・マン教育を基本とする設計教育においては、先生との相性が極めて重要であることを示唆している。また、「自分の取り組みたい課題をじっくりとやりたい」という意見も多く、課題の自由度あるいは選択制といったことを考慮する必要がある。最も驚かされたのは、多くの人が「図面の書き方がわからない」と答えていた点である。課題を消化することに追われ、基本的な習得がなされぬままに、3年次を迎えてしまった、という意見であり、基礎的訓練の必要性を改めて実感させられた。

《班分けについて》では、成績順で決めることに関しては、拒否反応を示す人が多く、自由選択制を希望する人が多かった。

《講評会について》は、教育環境の悪さ（見えない、聞こえない）の指摘と、作品の善し悪しに関する評価の曖昧さを指摘する人が多かった。

次の《評価について》の中にも、先生やクラスによる評価の違いが指摘され、複数制の評価を提案しているものもあった。

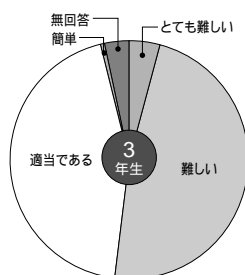
建築3年生のみを対象としての設問である、《過去2年間の体験を踏まえての意見》の中には、次のような意見が寄せられた。

「もっと基本を教えてほしい」「もっと実務的なことを学びたい」「設計の授業以外に、週2時間位、課題と直接関係することを教えてもらう時間がほしい」「最終の前に中間講評会のようなものがほしい」「2年までにもっとデザインに関する講義がほしい」「建築のデザインだけでなく、デザイン行為全般にわたって楽しめるワークショップ的なものにしてほしい」といった内容である。
(文責：大川三雄)

4年（設計演習）

今年度、設計演習を受講した学生は全部で81名（建築：49、群：18、CAD：14）であった。そのうち

課題内容は難しいですか？



58名（建築：30、群：18、CAD：10）から回答を得た（71.6%）。設計演習（4年前期・選択）が、将来建築デザインを目指す学生が受講している。自由記述式の質問では、全部で211項目（A4で10ページ）の回答があった。重複するものもあるので、ここでは、紙面の都合上、主なコメントをそのまま掲載する。

《建築設計について》

- ・社会問題を考慮し建築ができること、人に与える影響を考えること、なかなか答えが見出せない。考え方が、答えが幾つもあるから。
- ・プログラムの組み方。考えや提案を表現して伝えること。
- ・すべての判断は自分の知識と経験から下され、結果が表れるから難しいが楽しい。
- ・形態論・建築論は面白いが、奥が深い、やればやるほど深くなる。

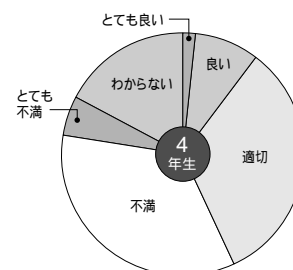
《課題について》

- ・課題数が多い。他の大学はもっと少ないと聞いています。半期で1課題が適当だと思う。
- ・ひとつの課題をもっと長い期間で深く掘り下げてやっていきたいと思う。
- ・4年になって、ひとつの課題を半期にわたって長く煮詰めていくのが、こんなに大変であり、建築をやっていくのが本当に大変だと感じています。
- ・先生によって課題が変わるのはよいことで、さまざまな考え方を聞くことができるほうがよい。設計と他の教科が絡んでいなくて理解が少ない。
- ・毎年、課題を変えたほうがよい。
- ・なるべく期間が短い課題の場合は、敷地をなるべく近い場所で、何度も見に行ける所にしてほしい。
- ・敷地が決まっているときなどは、その敷地に対する情報（図面）をもっと提供してください。

《班分けについて》

- ・もっと初期の段階から先生を選べたほうがよい。合わない人が必ずいる。それによって考え方も変わるし、よくない影響がある。
- ・先生を成績に関係なく選べるほうがよい。
- ・班分けよりも、クラスによって学びたい先生に当たらないことが不満。
- ・1回、先生と面接のような形でコミュニケーションを取らせてもらってから、先

今の班分けをどう思いますか？



生を選ばせてほしい。

《講評会について》

- ・講評会には、偶数、奇数、学年に関係なく参加したい（授業があって参加できない）。授業以外に設けてもよいのではないか。
- ・先生たちのための講評会ではない！ もっと学生の意見と、先生たちの意見を戦わせるような講評会にしたい。
- ・プレゼンテーションに対するコメントが少なく、時間がかかるのが難。しかし、優秀者だけがプレゼンテーションするのはよくないかもしれない。
- ・大きなホールなどで、みんなが集まってできるほうがよいと思う。
- ・講評会を2回に分けて、それぞれの作品をもっと見てみたい。
- ・先生のけんか腰の討論は大変面白い。

《評価について》

- ・作品全体で採点されるよりは、どの部分がどのように良いのか悪いのか、細かいアドバイスがほしい。
- ・先生によって違いがあるのはよいと思いますが、それによって設計演習などがとれない人が出るのならよくないと思う。
- ・先生によってとらえる観点が違いがあり、評価がまちまちである。一般的に女の子に対して、どの先生も甘いような気がする。
- ・何を基準に評価しているのか、はっきりしてほしい。また、すべての先生の評価も初めにほしい。

《4年間を振り返っての意見・感想》

- ・模型をつくる場所、道具や模型を保管する場所が、こんなに大きな大学なのに場所がなく、設計する上でやりにくい所だったとは思わなかった。大学の先生だけでなく、実務で実際に活躍されている方が講師として大学に来るのはとてもよいことだと思う。刺激にもなるし、あこがれにもなる。
- ・1年生から深い専門的な設計教育に触れ、4年間という短い期間でもっとたくさんのことを学べたらよい。
- ・先輩たちのよい作品が展示されていて、常時見られたらよい。
- ・授業に出なくともいいような状況になっているのがまずい。指導の方法を変えて、勉強させる方法にする。
- ・設計演習のように各自で敷地・テーマを決める科目をもっと早い学年から始められるようにする。1年から製図をやったほうがよい。設計と同様に建築計画をもっと重要視する意識を持たせるべきだ。
- ・設計演習で初めて学校に泊まって作業をした人が多かったと思いますが、2年のときからそれぞれのスタジオを持って、設計をやりたい人は、設計の合間に授

業に行けるような体制になってほしい。

- ・学生と先生のバランス（指導の仕方）が悪い気がする。
- ・1年のときは基礎教育がメインでよいと思っていたが、今思うと1年のときからもっと建築と接する時間があったほうがよかったと思う。
- ・手法が自由のため完成度に差がでる。講評会で取り上げられる作品はCAD、CGを使ったものが多い。確かに、美しいし、わかるけど、だったら全員にパソコンの授業をするべきだ。持っているかないかでの差で上下がついている気がする。今までいいと思った先生は二人だけだった。期待ばかりされて殆ど指導していない。ちゃんと話してくれる先生とそうでない先生の差が激しすぎる。はずすとその授業を無駄にする。それを自由とはいえない。
- ・設計をやりたくて入った学生が、成績が悪いからといって、演習が取れないのはバカげている。
- ・卒業制作では副担を自由に選べないのはよくないと思う。
- ・卒業制作が10月提出ということに不満。大学院入試などに重なると集中できない。
- ・卒業制作と卒業研究の提出を逆にしてほしい。卒業制作と卒業設計の順番が逆だといいと思う。

《設計演習 について》

- ・くじ引きによる班分けはやめたほうがいい。1～3年生は先生一人に学生が多すぎる。
- ・今までにないことばかり（1課題半期、グループ設計）で、新たな考え方、自分が発見できた。ただ、グループ設計はとても体力、気力、気を使い、その中で常に自己主張することが大変であった。充実した課題であった。
- ・先生によってあまりにも課題が違いすぎて、班同士の交流ができない。
- ・設計演習は、今までになく厳しい日程だった。しかし、これまでやると充実感があるし、よいと思った。ただ、最終提出物への取り組みをもう少し早くしないと、内容のあるものができない。
- ・3年までのレベルを考えると、急に高度になった気がした。
- ・中間発表からの時間が少ないように思う。また、中間発表にもっと時間をかけてほしい。担当の先生の意見をもっと聞きたかった。合評会は最も大切だと思うので、もっと時間をかけて意見を聞きたかった。
- ・自分は群設計でないグループを選んでしまったが、学部の中にグループでの設計もやってみるべきだと思う。

（文責：渡辺富雄）

追想のストックホルム大学

関沢 勝一

建物は生き物である。人間がこの世に生まれ社会の中で成長していくように、建物もまたそれを暖かく大切に作る社会と人々の中で成熟する。建築として竣工したときに人々にもてはやされた建物も、その隣りにその建物を無視したようなわがままな建物が建てられたり、時期がきても補修せず、世の中のニーズに応じて新しく機能を補充するデザインを付加しなければ、建物は老化し崩壊してしまう。



スウェーデンの短い夏は美しい。

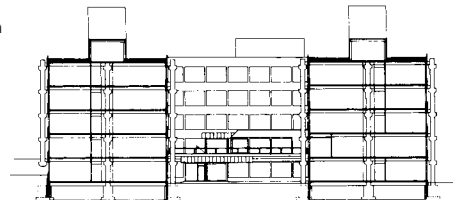
この8月の中旬、私は人影がほとんどないストックホルム大学の緑の広々としたキャンパスに立ち、芝生の向こうに朝の陽光を浴びている化学研究棟を眺めていた。その建物は明るい表情で、私を歓迎しているかのように見えた。そのとき、私はその建物が生きていることを確かめることができた。

想いは35年前にさかのぼる。30歳になったばかりの私は、ストックホルムで建築の勉強をしていた。研究としては老人ホームや障害のある児童の学校をテーマとしたが、建築

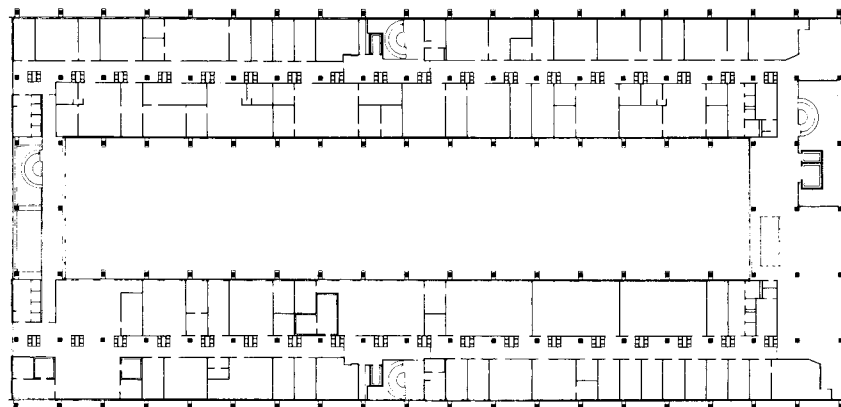
デザインの実務にも励んだ。アーキテクトSAR、カール・ニレンの設計事務所で64～65年に経験したことは、それまでは大学院生の時代に前川国男先生の事務所で勉強させていただいた時期を除いて、私には貴重な時間であった。そのとき、私は日本の建築教育の内容と建築事務所における実践が日本独自のものであることを思い知らされ、そして驚いた。

私の師、C・ニレンはスウェーデンではG・アスブルンド(1885～1940)の次世代のアーキテクトとして秀れた力量をもち、多くの作品を残している。1917年生まれ、彼は本年82歳。1942年にストックホルム・王立工科大学(KTH)のアーキテクチュアを卒業している。出身はスウェーデン中部のスコーネ地方、農業には適さない土地で、人々

Section



Plan (1F)



100 m

資料：NYRÉNS arkitektkontor ab, ArkitekturMuseet, 1989

は勤勉であり、森林が作り出す木材の文化をもっている。C・ニレンの作品には木材を生かしたデザインを中心にしたものが多いのも、彼を育んだ風土の影響を読みとることができる。この化学研究棟は、スウェーデンの伝統的なレンガ・石の組織構造とは対称的にRC造プレキャストの軸組構造を採用した異色の建物であり、彼の木造軸組への興味を作品の中で表している。

私はこの建築の基本計画の段階で参加させてもらった。もともとストックホルム大学は、工学部と医学部を除いた総合大学であったが、歴史が浅く、ストックホルムの市内に、日大のように点在していたが、新たに市の北郊、フレスカティの地に統合されることになり、北欧の国際コンペティションが行われた。当選案はデンマークのヘニング・ラーセンの案であったが、この自然の美しい土地に広大なコンクリートの人工地盤をつくり、その上に建物をつくるデザインであった。H・ラーセンは第二次案まで提出したが、ストックホルム市は最終的に彼の案を技術上の理由で破棄した。H・ラーセンの案は、現在の地球環境の視点からみれば不適當であり、結果的には市の判断が正しかったと私は思う。

プレキャスト構法を採用した理由として、ローコストの建物をつくることに適していること、化学実験のために数多くの換気ダクトを上下・水平に組み込むことが容易なことを彼はあげている。建物は1968年に実施設計が終わり、1973年に完成した。その後、1995年、同じデザイン・コンセプトによる化学実験棟が増築されているが、これはC・ニレン事務所のパートナー、T・ローセンの作品となっている。C・ニレンは、私が勉強した時代の所員12



ストックホルム大学、フレスカティ・キャンパス
芝生越しに化学研究棟を見る。
右端は増築された化学実験棟の一部。



キャンパス広場に面したファサード。木材を豊富に利用したデザイン

プレキャスト・コンクリートの柱と梁から構成される Elevation

名ぐらいの事務所を改組し、現在では数名のパートナー方式を採用し、時代の変化に対応するために多様な専門家を数多く抱えている。



再び、私は目の前の思い出深い建物を見つめる。増築の際に古い棟も部分的にリニューアルされ、歳月とともに急速に退化する宿命にあったこの近代建築は生きていた。

通りかかった男女の大学生に自分の写真をとってもらいながら、「私は日本から来たアーキテクトで、35年前にこの建物に関わった」と話したら、「本当？」という顔をされてしまった。(1999年12月)

(教授)

(注)ストックホルム大学、フレスカティ・キャンパスは地下鉄 Universitet 駅下車(中央駅 T-Centralen より15分)

ドイツの地域スポーツ事情

若色 峰郎

昨年8月30日から9月22日まで、海外派遣研修の機会を与えられたので、スポーツ先進国であるヨーロッパ、とりわけ地域スポーツに力を入れているドイツのスポーツ施設を視察することにした。

それは、少々古い話になるが、1960年にドイツ・オリンピック協会（当時、西ドイツ）はゴールデンプランを発表し世界的に注目された。その内容は、高度文明社会がもたらす健康危機、人間疎外、レジャー問題などは先進諸国に共通する国家的課題であるとして「健康・プレー・保養に関する基本方針」を定め、これに必要な各種の施設整備基準を発表し、1975年までの15年間で達成するために必要な財政支出を国3、州5、市（町）2の割合で負担するというものであった。この壮大なゴールデンプランはスポーツ振興施策であったが、直ちにすべての自治体に受け入れられ、急速なピッチで整備が進められた。そして現在、国民の健康を確保し、スポーツへの参加者を大幅に増加させ、健

康・スポーツ大国への道を行んだ旧西ドイツの地域スポーツ施設の状況をみる好機と考えられたからである。

フランクフルト郊外の保養地パートホンブルグにあるゼーダムバード（プール）は1970年に設立され、1990年にリニューアルされた。公共の屋内・屋外プールとして、一般市民・地域スポーツクラブの利用、学校授業の場（周辺16校の共同利用）として使われている。施設内容は屋内プール／多目的プール、競泳プール、スライダーなど、屋外プール／競泳プール3カ所などを設け、屋内の多目的プールから屋外プールへの泳ぎ出しや、開閉式上屋（ガラス円形屋根）による内外空間の一体化の試みは興味深いものであった。

4月～10月は屋外プールも使用し、ピーク時は6,000人／日も利用者があるという（地理的な状況を反映している）。

同様の規模をもつ施設が、フランクフルトの市内や郊外に3カ所あ

り、それぞれに施設の特性を表し、趣向をこらしたさまざまな遊びの要素が組み込まれ、プール水を使った多彩なプログラムが用意されていることに感心した。また、敷地は3.6haもあり、なだらかな芝生広場と大きな樹木に覆われた環境は、水泳を楽しみながら芝生で日光浴ができるという、スポーツを楽しむ恵まれた条件を備えていた。

カールスルーエにあるヨーロッパホール／大規模多目的スポーツホールは、広大な公園の一画に建てられた吊り構造の支柱が印象的。

ドイツは緯度の関係で冬期の陸上競技場を確保する必要があり、この施設は全天候型の陸上競技トレーニングセンターとして設けられたものである。アリーナの広さが96m×69m、一周200mのトラックと60m走路を備えている。フィールドには木質系下地の上にポリウレタン系床材が張られており、各種の練習単位や、学校授業、地域スポーツクラブの練習の場合は、天井より可動間仕切を下ろして使用できる（4分割）。ハンドボール、屋内サッカー、テニス、アーチェリー、ボクシングなど、幅広い活用が可能となっている。

観客席は固定席（2,800席）、移動席（1,200席）を備え、さまざまなスポーツイベントに対応できるものになっている。アリーナの中央部は9列のトップライトが設けられ、採光に役立っている。管理者によれば、設立当初はスポーツ系の利用のみであったが、現在ではコンサートや他のイベント会場としても利用するようになり、その割合が40%にも達してきたため、その対応に苦慮しているということであった。

この施設と同様のものを、デュッセルドルフのラインスタジアム、フ



ゼーダムバード / フランクフルト

遊びの要素をもったプール。屋内プールから屋外プールへ泳ぎ出しができる





ヨーロッパホール
/ カールスルーエ

多目的スポーツホール
アリーナは4分割が可能

ランクフルト郊外のカールバッハにある総合運動ホールでも見学したが、大空間を確保するための架構計画、構造材料には違いがあるものの、規模や計画条件はほぼ共通していた。

ドイツのスポーツクラブの約40%は、100年以上の歴史をもつツルネクラブ（体操を主としたクラブ）である。戦後、ドイツのスポーツを統轄するスポーツ連盟が結成されたとき、ドイツ・ツルネ連盟は各競技別のスポーツ連盟に加盟し現在に至っている。そして、スポーツクラブは、地域社会の住民によって生まれ、単なる身体活動の場としてのみではなく、地域住民の共同の生活の場をつくりあげているといっても過言ではない。

ドイツのスポーツクラブには、多種目のクラブをかかえ、そのクラブの拠点となる体育館や屋外スポーツ施設をもつ大型のクラブから、各スポーツ種目ごとの小さなクラブまで、その形態はさまざまであるが、いずれにしても国民の30%は何らかの形でスポーツクラブに所属しているという事実は、スポーツ愛好者の拡大に大きな力になっていると思われた。

カールスルーエ市のダーラッハ地

区にある「スポーツクラブ 1864」は、その名の通り1864年に創設されたスポーツクラブである。体育館そのものは、近年、建て替えられたものであるが、アリーナはバスケットコート3面（48m × 30m × 9m）の標準型で、利用単位により3分割が可能、観客席は長辺方向に収納できるロールバックチェアスタンドとなっている。そして更衣、ロッカー、シャワーの設備もアリーナの利用単位で使用できるように計画されており、ドイツのスポーツ施設規準の徹底ぶりがわかる。この体育館は全体を約4mほど地中に沈め、周辺の住宅やアパートのスケールと調和するよう配慮されているが、屋根面のトップライトと側窓により、スポーツ空間として十分な光を満たし

ていた。また、設備については、床暖房と天井給排気が標準仕様になっており、利用者主体の快適で安全性な施設づくりがみとれる。

この他、ドイツでは保健医療制度に組み込まれているクア施設（主に温泉などを活用した治療、療養施設）が、コミュニケーションと運動を中心とした健康回復の施設に変わりつつあり、温泉水を利用したプール（大浴場）が近年建設され、重要な役割を果たし始めている。

今回の研修によって数多くの事例を見ることができ、新しいニーズに合った多目的で、快適かつ安全な施設づくりとは何かについて考えさせられる点が多く、十分に成果が得られたと思う。研修を支えて下さった方に感謝したい。（教授）



スポーツクラブ 1864
/ カールスルーエ
周辺環境に合わせた外観

トップライトと側窓により採光、
アリーナは3分割が可能



ダルムシュタットに行ってきました

加藤未佳 + 下田典大 + 多田吉宏 + 戸内広太郎 + 佐藤慎也 + 本杉省三

去年の夏、ダルムシュタットに行ってきました。ダルムシュタットは、フランクフルトの南に位置するドイツの都市の1つです。そこにあるダルムシュタット工科大学で、国際交流を目的とした日本大学理工学部との共同ワークショップが、1999年の8月30日から9月10日まで行われました。日本からは、建築、海洋建築工、交通土木の各学科から、14人の学生と本杉先生、私（佐藤慎也）が参加し、ドイツからは、17人の学生とハウシユルト先生、2人の助手の方が参加しました。

“waste land”と題された課題の内容は、フランクフルト近郊にあるアウトバーンのインターチェンジ周辺に対し、何らかの提案を行うというものでした。参加者全員を、6つの日本+ドイツの混成グループに分け、それぞれに作業を行いました。そのグループの中では、もちろん、英語によるコミュニケーションが必要となります。そのワークショップに、建築学科からは4人の学生が参加しました。彼らは、参加しているドイツの学生の家にホームステイをして、毎晩のようにパーティーを楽しんだり、発表間近には研修施設で夜中まで作業をしたり、大忙しの毎日でした。その彼らから、ワークショップの感想をもらいました。順番に紹介します。

まずは、大学院1年生の加藤未佳さん。

《ワークショップでは、言葉の問題とともに、お互いの手法の違いに何度もつまづきました。日本では、まずコンセプトをしっかりと組み立ててから、何がその敷地に必要かということから入っていくのに対して、ドイツの学

生は敷地を見た瞬間にイメージが湧き、機能や意味よりも先に自然に手が動き、スケッチを描き、形状が出来上がってしまいます。その形状は一度できてしまうとなかなか崩せないのです。また、ドイツでは通常1つの課題に1年程度取り組むせいにか、日本人が「このベースじゃ終わらない」と焦っても、「できたところまで大丈夫」とまったく動じないところなど、違いをあげればきりがありません。

でもこの違いが大変面白く、ドイツの学生が何を考え、どのように計画していくのか、さらには文化や歴史的背景を通じ、どのような価値観をもち、どのようなライフスタイルであるかを一部分でも知ることができたことは大きな収穫でした。それともう1つ、帰国後もお互いにe-mailで連絡をとりあうなど、交流が続いています。外から日本を見ることは自分自身を見つめ直すよいきっかけになります。私はこれからも機会があったら、このような国際交流に参加していきたいと思っています。》

そして、3年生の戸内広太郎君。

《ダルムシュタットと私のいる大学との比較を考えると、学生のおかれている環境や気質に大分違いがあるような気がします。ドイツの大学では学年というものがなくて、与えられた課程を修了すれば卒業ということだそうです。セミナーに参加したドイツの学生は、私よりみな年上でしたが、話を聞くと10年以上も大学に籍をおいて学んでいる人もいと聞きました。ドイツの大学では学費は基本的に無料、また参加したドイツの学生の



半は、建築関係の会社でも働いていました。ですから、短い付き合いながらも彼らのなかに、しっかり建築を学んで自分のものにしていこうという意志を私は感じました。

こうした、学ぼうとするものに対する社会全体の支援や環境の整備は、日本は遅れているのではないのでしょうか。

大学が学ぼうとする人や社会に対して、もっと開かれてもいいような気がします。》

次も、3年生の下田典大君。

《「ヨーロッパに行ってそこにいる人たちと接してみたい」、それが私が今回のワークショップに参加した主な理由でした。私はこれまでワークショップに参加した経験がなく、共同でのづくりをしていくことも初めてでした。だから、私はワークショップそのものよりもヨーロッパという未体験の場所を感じて、そこで暮らしている人たちと一緒に何かができることに興味がありました。

実際ドイツに行ってみると生活・環境・考え方・文化などの多くの点で違いがあり、また、あるところでは意外な共通点があったり、と常に新しい感動を身に受けていました。ワークショップにおいてはものづくりだけではなく、ダルムシュタット工科大学の紹介や案内をしてくれたり、街の中やフランクフルト、ハイデルベルグなどいろいろな場所に連れて行ってくれたり、パーティーを開いてくれたりと、とても充実した日々でした。ワークショップの参加者はみな優しく、私のつたない英語に耳を傾けてくれたり、途中で風邪を引いてしまったときも親身になって世話をしてくれたりして、とても嬉しかったです。

今回のワークショップは非常に貴重な体験となり、これからもさまざまな人々が参加し、さまざまな場所で行

われる活動に参加していきたいと考えています。》

最後も、3年生の冨田吉宏君。

《僕らのチームは、各自でアイデアを持ち寄り、それらをみんなで話し合っ形にすることを繰り返しながらつくった。その場で案を出し、スケッチを使って英語で伝えるという辛さはあったが、慣れてきたら楽しくて仕方がなかった。完成度はともかく、外国の人と作品を「つくった」というのが僕のなかでは大きい。

ドイツの人は遅くとも6時には切り上げ、毎晩、ピアガーデンやパーティーやクラブに連れて行ってくれ、そこでいろいろな人に出会えた。特に、電気や水を学校から引いてきて、学校の敷地内に車を改造して住んでいるアーティストとは、今でもメールを交換する仲になれたし、10月には2週間ばかり僕の家にもホームステイに来た友達もできた。

ドイツの人は文化の違いはあれ、基本的には変わらないと思った。みんなコールハースやMVRDVは好きだし、最後は徹夜して作品をつくるし、建築に夢を持っていた。今年には、彼らが日本に来る。それまでもう少し、日本の文化と建築と英語を勉強しておき、最高のワークショップにしたい。》

それぞれの感想ではありましたが、4人は、ドイツだけではなく、他学科の学生、先輩・後輩と、さまざまな人たちとのコミュニケーションを経て、ワークショップを最後までやり抜きました。4人の成果は、掲載した作品の写真からうかがえると思います。

そして、最後の冨田君の言葉にあるように、今年は彼らが、ダルムシュタットからやってきます。また、意欲ある大勢の学生の参加によって、最高のワークショップが、この日本で行えることを楽しみにしています。

(文責：佐藤慎也)





建築の皮膚

薩田 英男



2年ほどヴェネツィアで留学生生活を過ごした。水に浮かぶこの不思議な島での毎日のなか、迷路に沿って続くボロボロに朽ちた壁に興味をひかれた。時の中で刻まれたしみや汚れは、個性的で生き生きとしていてまるで抽象画のように美しく感じられた。現代的な材質や表情に慣れていた自分にとっては、とても新鮮な体験だったと思う。

季節や日々のなかで建物が光とどう対話するのか。建築が時間の変化のなかでどうしたら美しくなれるのか。それは建物を通して人が時間を感じることもであるが、その思いが建築の皮膚である仕上げの重要性に目を向けさせる。工業製品が持つ同質で平滑な固いものよりも、むしろ多少性能は落ちるがばらつきのあるザラザラとして柔らかなもののほうがより時間との対話を促す。ざらつきや柔らかさは光を拡散させ、空間に奥行を与える。さらに、汚れや風化は建物に時を刻み込む。均質で頑なに朽ちることを拒むものに比べ、朽ちながらも変化し再生してゆくもののほうが個性的で自由である。その様が建物を永く風景に留めることとなる。まさにヴェネツィアで感じた思いがそれであった。自分にとってそのことの一つの答えが、継ぎ目なく塗られた皮膚のような左官壁である。

今までの仕事のほとんどが内外ともに左官仕上げ、特にこのごろは「土」そのものが塗られている。「土」は地域性があり、またその場で再生を繰り返すことのできる素材である。また、その土地の職人さんとの対話を通して建材となる。計画通りにはいかない「もの」と「ひと」の出来事の面白さがある。左官はよく値段が高いというが、工夫次第のように思う。寿司ネタの時価、つまりお互いの折り合いのよいところで決まる。多少一般的な契約からは外れるが、まとめ買いの仲買のつもりでその土地の旬な「土」を塗っている。どこもかしこも左官なので量もあり、自分の仕事が表にすることで職人さんも納得してくれているように思う。

土の思いが膨らんで、昨年は京都・丹後で設計仲間や学生とワークショップを開いた。その場の土に生石灰を混ぜ、泥団子の風呂を造った。さらに現在 NGO を結成し、南米ボリビアで土の日干しブロックを使って識字教育のための教室づくりを進めている。今年には日本の左官職人とともに、地元のインディヘナ（インディオは差別用語とのこと）の人々と生石灰を入れた日干しブロック作りのワークショップを開いた。あまり日本から材料は持ち込まず、その地域の土を使って実際にその建物を使う人達の手で造りたいと思っている。



筆者略歴

薩田英男（さつた ひでお）

- 1955年 北海道に生まれる
- 1978年 東京理科大学工学部建築学科卒業
- 1978年 U&A都市建築設計事務所
- 1981年 AUR建築都市研究コンサルタント
- 1987年 イタリア政府給費留学生としてヴェネツィア建築大学留学
- 1990年 薩田建築スタジオ主宰
- 1990年 東京工科専門学校非常勤講師
- 1998年～ 日本大学短期大学部非常勤講師

藤枝・能舞台のある家
長崎・研究所の玄関ホール
丹後・泥団子の風呂
ボリビアワークショップ（NGO）

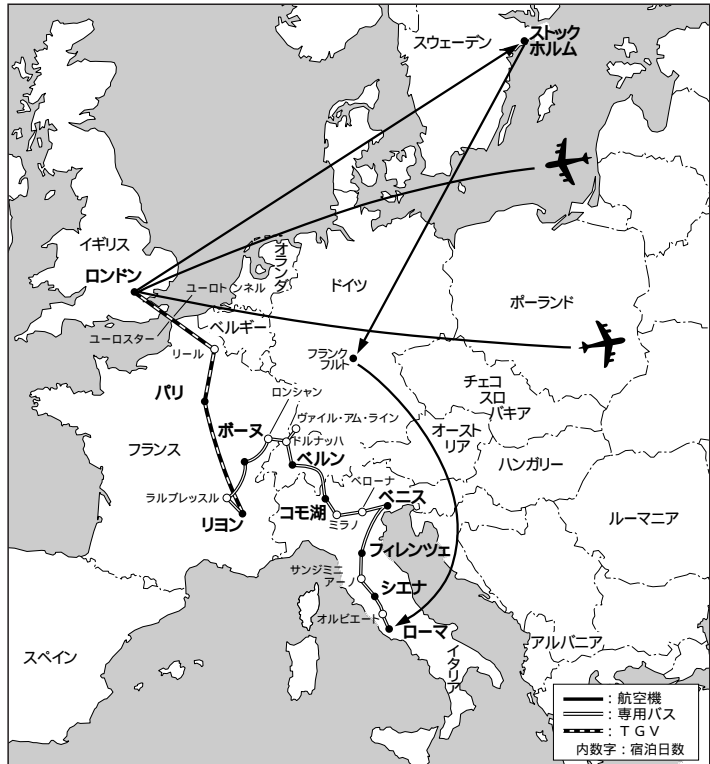
第31回 建築学生 海外研修旅行 報告

A班

平成11年8月23日～9月13日
引率/木村 翔 教授
田所辰之助 短大助手

B班

平成11年8月27日～9月17日
引率/岡村 武士 助教授



ヨーロッパ文明のふたつの源流 アルプス山麓と交差するヨーロッパ建築の南北軸

A班 木村 翔 教授

今回の研修旅行は、ローマ、パリ、ロンドンというヨーロッパを代表する三大都市を軸として、北欧の街ストックホルムを加え、シエナ、フィレンツェ、ベニスなど、魅力あふれるイタリアの諸都市を巡ったあと、テラーニ、シュタイナー、コルビュジェの近代建築の名作を訪ね、さらに現代建築の実験場リールにも立ち寄りというヨーロッパを南北に縦断するコースで、豊富な研修先がいっぱい詰まったややハードな日程であった。

参加申込者が多かったので、出発日を4日ずらして同じコースを研修するB班を別に設定し、岡村先生に引率していただくことになった。

われわれの引率したA班の構成は、大学院生6名、4年2名、

3年26名、2年1名の計35名であったが、22日間の研修を通して、それぞれがしっかりと自分の考えをもって意欲的に研修に励み、真面目に“建築”の勉強に取り組んで、大きな研修の成果を上げることができた。

今年のヨーロッパは、全体的に暑かったがよい天候に恵まれ、抜けるような青空のもとで気持ちよく研修を続けることができた。団体・自由研修を通して、100に近い名建築に接し、広場、街並み、都市を含めてそれらを実際に自分の目で見ることにより、そのスケールを感じ、周囲の環境や景観の中での存在を感じ、空間の豊かさを感じることができた貴重な体験を、今後、大事に育てていって、将来に役立ててもらいたいと思う。

B班 岡村武士 助教授

BA007便、3年生4名、2年生17名は、深い眠りに入っている。それは、満足感のある寝顔であり、明らかに出発前とは違っている。Kr, Lire, SF, FF, £の歴史的伝統や文化、そして、人々とのふれあいから新たな視点でモノを見ることを学び、たくましく成長している。

ヨーロッパの光と影がかもし出す“空間”は、われわれに何かを問いかけている。その問いかけを肌で感じ、純粋な自分の心で読みとり、そこから「自分は何を求めているのか」を発見してほしい、そして、何よりも楽しい旅であること、をテーマとした海外研修旅行であった。

建築を学ぶプロセスの中で、もっとも大切な学年の引率は

責任の重い任務であった。そこで、独創性を育むため、添乗員の協力を得て、都市ごとに見所を記した「歩こう」noteを作成、見学先の選択を各自でプログラムするよう努めた。

22日間の旅もFinish。しかし、学生たちにとって“建築の旅”は、まだまだ始まったばかりである。建築は“ものづくり”。人まねではなく、新しいものを生み出すのが“ものづくり”の本道。自分自身で見聞して得た貴重な体験を財産に「建築」に対してより興味を抱き、情熱を高めていってほしい。そして、再度、ヨーロッパを訪ねてほしい。いつ訪れても新鮮な大地と太陽、そこに暮らす陽気で楽しい人々が迎えてくれるはずである。

A班



行ってよかったです!!

田中布美子(3年)

22日間のヨーロッパ研修は、本当に貴重な体験をしたと思います。何もかもが、刺激的で感動の連続でした。

最初の国ストックホルムでは、本気でこの国に住もうと思ったほど絵葉書のような景色に魅了されっぱなしでした。空の色、水の色、空気、建物……、すべてのものに透明感を感じ、また建物ではアスブルンドのストックホルム図書館の円筒の形や鮮やかな黄色の外観、内観の雰囲気が印象に残っています。

ストックホルムと正反対に見えた国が次に訪れたイタリアです。滞在日数が一番長かったせいもあって、強い印象を残した国です。

衝撃はそこだけではなく、22日間受けっぱなしだったような気がします。スイス、フランス、イギリス、どの国にも多くの思い出が残っています。日本と海を隔てただけで、まちなみ・建物・高台から望む景色・地下鉄の乗り方に食習慣・人・言葉など、本当に何もかもが異なり、その違いに驚きを感じたのと同時に、実際に自分の目で見ることでできたことに幸せを感じました。とてもハードな旅でしたが、このような貴重な体験はもう二度とできないと思います。



ストックホルム市庁舎

研修旅行を通して

町田めぐみ(2年)

この研修旅行では多くの素晴らしいヨーロッパの建築や、日本とは違ういろいろな都市の独特な雰囲気を肌で感じることができた。そして、本や雑誌でしか見られなかったものが、近くに存在しているだけで、ものすごい感動だった。

ストックホルムは、アスブルンドの市立図書館とエストベリの市庁舎が印象的だった。どちらも空間と光の関係を巧みに使っていたように見えた。

図書館の円筒形の貸出し室は三重の本棚が壁面に沿ってあり、入った途端に圧倒されてしまった。閲覧室と貸出し室のつなげ方は自然な流れで、入口の暗さと貸出し室の明るさが対照的だった。市庁舎の青の間は、ホールのバルコニーと階段の配置とトップライトからの光が美しかった。光を浴びたレンガの美しさから敢えて青い漆喰を塗らず、赤いレンガのままにしたわけもわかった。ここにいると、多くの人が集まって式典を行っている様子が目に浮かぶような気がした。

何と言ってもローマは楽しかった。3日間があっという間に過ぎていった。印象はきれいな町というか、古いものがごちゃごちゃと町に溢れかえっている、でも、一つ一つにはとても重いどっしりとした存在感



コロッセオ

があった。サン・ピエトロ大聖堂、パンテオン、コロッセオはスケールの大きさにただ驚いてしまった。また、夜のローマは不思議な雰囲気だった。スペイン広場でジェラードを食べ、トレビの泉では座って泉を眺めたり、友達と話をしたり、観光客が地元の人なのかわからない中にまぎれていた。夜中に見るフォロロマーノは暗闇の中に照らされて不気味だった。

未知なる体験

杉崎裕二(3年)

長いようで短かったヨーロッパ海外研修旅行を通じて、さまざまな体験をし、たくさん新しい知識を身につけた。ストックホルムでは広大な自然を味わい、イタリア各都市のドゥオモの大空間を肌で感じ、美しいベルンやパリの街を歩き回った等々の思い出は、今でも脳裏に焼き付いている。

なかでも、最も自分の中で印象に残っている建築物として、“サン・ピエトロ大聖堂”が挙げられる。この内部空間での感覚は言葉ではうまく表現できないが、肌に感じる空気や、上部の窓から差し込む光、巨大な彫刻、壁画などにより、別の次元の空間に入り込んだかのような感じさえ受けた。内部は薄暗いため、あまりうまく写真に写っていなかったが、床、壁、柱、天井など、すべてを写真に収めたいと思ったぐらい見ごたえがあった。自分はヨーロッパの古い建築に対する興味はそれほどなかったため、建築様式などの知識は大して持っていなかったが、そんなことぬきでもこの空間は自分を魅了し、新たな関心を引き寄せた。

こころに残った出来事

押田佳代子(3年)

1.ローマの街並：バスの中から初めてコロッセオを見た時の衝撃は大きかった。心構えができていなかったため、「なんだっ



サンピエトロ大聖堂



シエナ カンポ広場



フィレンツェ大聖堂

で!?」という感じだった。車道からすぐのところ、あまりにも有名な古代遺跡が、あまりにも無造作に、でかかど、現代と共存していた。

周りに建っている建物もどれも古いものであったため、夢の中にいるようで、うろたえてしまった。

2. フィレンツェの夜：夜の散歩は、旅を通して楽しみのひとつであった。フィレンツェの夜の広場は、わくわくするようなことであふれていた。

ある人は、体中を黄金色に塗り、その姿は像のようで、お金を入れるとぜんまい仕掛けのように動いた。火の上を歩く人や音楽を奏でる人、さまざまなパフォーマーがあちこちにいた。どの人も、多くの人々を引きつける魅力をもっていた。まさにエキサイティングだった。

3. ベニスの花火：夜の11時頃、ワインを買いに外に出ると、海の方から花火の音が聞こえてきた。まさかと思い走って行くと、本当に対岸の島で花火が打ち上げられていた。日本では見たことのない模様のももの打ち上げられており、「ベニスで見ちゃったよ」と語りながら、船着場に座って眺めた。

サン・マルコ広場では、ピアノやバイオリンが演奏されており、人々が集まっていた。

4. 建築物：システーナ礼拝堂の「最後の審判」を目にした時は、全身に鳥肌がたった。まさに「すごい」の一言であり、圧倒され、目が離せなかった。天才は、本当にいたのだと思った。

ミラノの大聖堂では、ステンドグラスの美しさもさることながら、細部まで彫刻の施された外観に驚いた。あの建物の上には、いったい何人の人間の彫刻が立っているのだろう。信仰心の深さというか、執念を感じた。

ヨーロッパでの日々は、私のところを大きく揺さぶり、いろいろな想いをいだかせた。

ベネチアへもう一度

田邊雅則（4年）

ベネチアは私にとって、とても魅力的な都市だった。イタリア人の陽気がいい加減な気質が肌に合ったのか、イタリアという国がとても好きになったことも一つの要因だと思う。

海から見た光景は、まるで都市が建物単体が海に浮いているように見えてとても不思議なものだった。また、各所にある広場の使い方にとても惹かれた。とても使い方がうまいのである。オープンカフェはもちろん、夜には映画館になるのである。大きなスクリーンと簡単なスタンド、夜の暗さ、これだけで屋外映画館になる。そこは、近くの人達にとって大事な娯楽のひとつであり、社交の場となり、みんなと楽しく過ごす場所になっている。

街並みもよかった。おおよそ計画して作っていないだろうと予想されるほど、無秩序に見える街路は街のあちこちらにみえるが、雑多の具合が生活に密着しているように見えて、新しくきれいな街よりもよほど親近感が湧くのである。また、無秩序に見えるベネチアにも、大学には都市計画の授業があると聞いたので一度受けてみたいと思った。その前に、イタリア語の勉強をしないといけないんだけど.....。

ヨーロッパの印象

佐藤俊之（3年）

今回の研修旅行で、これまでの建築に対する世界観が大きく変わった。日本とは環境も文化もまったく違う国々を巡り歩いてみると、何もかもが新鮮でとても興味深かった。

ヨーロッパにおける建築材料は石材であることは知っていたが、いざ実際に目の前にすると、その迫力に驚かされた。さら

に、そのデザインは鮮烈で常に目的を持っているため、その歴史を調べていくと、時代ごとの背景が浮かび上がってきて、とても面白かった。特に、ローマにおける古代建築や数々の遺跡は“百聞は一見にしかず”で、その独特の雰囲気を感じとったことは、これから、建築に限らずプラスになったと思う。

また、ヨーロッパに比べ日本は“都市計画・都市の景観”における分野が遅れていることを実感した。ベルン・ロンドンなど、多くの都市が美しく便利な都市形成に努めている。一方、日本では京都でその傾向がみられるくらいで、さまざまなネオンが飛び交い、広場も少ない。これからは、穏やかな日差しを浴びながら人々がくつろげる場所を増やしていくべきである。

多くの建築物のなかで特に印象的だったのは、コルビュジェのサヴォア邸である。これまでも製図の授業で住宅を設計していたこともあり、その良さが強烈に伝わってきた。確かに5つの条件はすばらしいと思うが、それだけでなく周辺環境や光のとり方などには感動させられた。これからの建築に対する考え方の大きな参考になった。

フランス

島崎善央（3年）

今回の研修旅行は、自分にとって大変プラスになったと思う。また、どの国も街並みや建物が日本とは異なっていて、毎日がとても新鮮だった。

その中でも、フランスが特に印象に残っ



サヴォア邸



新大蔵省庁舎（パリ）

ている。それはル・コルビュジェの作品とフランスの街並みが魅力的だったからである。特にパリは歴史的建造物、歴史的風景の中に新しいものがつくられていて、そのコントラストが素晴らしく、刺激的だった。本を直角に広げたようなガラスのタワー4棟で構成されているフランス国立図書館やセーヌ川まで張り出している大蔵省新庁舎、デファンス地区の建物など、デザイン、構造が力強く感じられ、エッフェル塔やノートルダム寺院に劣らない新しいランドマークであるように思った。

ル・コルビュジェの作品の中では、ロンシャンの教会がよかった。実際に自分の目で見ると、想像していたスケールとは違い大きく、そして曲線を自在に使った独特な外観からは風に吹かれる雲のような感じを受けた。また、この土地の自然や風土に触れ、改めてコルビュジェの凄さを感じた。中に入ってみると、光のとりかたに驚いた。外からだとはわからないが、内側に向かって大きく広がっている窓からの光、壁と屋根の間の隙間から入る細い光が、神秘的な空間をつくりだしているように思えた。

フランスだけでなくどの国でも、人がいかに快適に暮らすことができるかを考えていて、工夫が見られた。そして、建築には宗教や文化が大いに反映されていた。この貴重な体験が、自分の中の何かを変えたような気がする。

パリの景観

西村陽介（3年）

研修旅行の全行程の3分の2以上を終えたところで、フランスのパリに到着した。それまでに訪れた数々の場所において、たくさんの歴史的建造物を見てきた自分にとって、パリは新鮮な感じさえた。

タワー、高層ビルなど、日本を含むどこの大都市においても見受けられるものであるが、パリが他の都市と決定的に違う点は、この街はデザインされた街であるということではないだろうか。凱旋門やエッ



新国立図書館（パリ）

ェル塔にしても、ルーブル美術館のピラミッドやオペラ・バステュークにしても、必ずその直下の大通りや公園、遠くにかすむ郊外の高層ビルなどとセットになって、素晴らしい景観美を作りだしているのである。また、パリの街並みは、セーヌの青い目抜き通りを中心にして、いくつかのブロックが重なり合いながら、それぞれが景観を競い合っているように感じられた。

印象に残った建築物の多い都市であったが、なかでもテット・デファンス、特にその屋上から見た景観が素晴らしかった。全面ガラス張りのシースルーエレベーターに乗り屋上に到着すると、凱旋門、コンコルド広場、ルーブル美術館、バステューク広場が同一線上に浮かび上がり、斜め前方にはエッフェル塔も見ることができ、一度にパリのランドマークの数々を視界にとらえられたことが、現在でも非常に印象が強い。

また、セーヌ川のほとりに建つ新国立図書館も印象が強い。開いた本をイメージして作られたデザインは、シンプルでありながらも切り口が鋭敏で、そこを訪れた人々や周辺の景観に心地よい刺激を与えているように感じられた。

研修旅行日記から

高橋扶美子（3年）

ヨーロッパ研修旅行で訪れた数多くの建築物の中で、特に深く感銘を受けたものについて日記の中から抜粋する。

9月5日(日) パーゼル郊外：ドルナッハにてルドルフ・シュタイナーのゲーテアヌ



モリスの赤い家

ムを見学。シュタイナーはゲーテの作品を若い世代に紹介する運動から自らの哲学的思想を確立し、それを演劇によって人間の精神世界を表現するという手法を用いる。1910年代には彼の作品を上映するのにコンセプトの合う劇場が見つからなかったことから、ミュンヘンに劇場を作る計画が持ち上がったが、結局はこの地に専用劇場を作った。曲線と不規則なアーチを多用した空間構成。さきまでメタモルフォーゼが起こっていたのではないかという錯覚を覚える。現在ここにあるのは1922年に焼失後、周辺のランドスケープと合うように再計画されたものである。ステンドグラスの効果も相乗して、不思議な雰囲気をかもし出している。ゲーテのファウストを全て上演できるのは、ここゲーテアヌムだけということから、芸術、演劇においての重要な地位を確立しているといえよう。

9月11日(土) ロンドン郊外：ウィリアム・モリスのRed Houseを見学。名前の通り、赤れんがの小さな住宅である。ビルグリム・レスト(巡礼者の休憩所)となるような存在で、アート&クラフトを自らの住宅をもってその快適性やすばらしさを表現している。どんなに狭い部屋でもやり方次第で宮殿のようなになる、といったモリスの赤い家は洗練された家具やオーダーメイドの壁紙、手で描いた天井の模様印象的で、手作りの良さとそれを愛したモリスの生活が想像できるような気がした。

西洋と日本

篠田智信（3年）

今回の研修は、北上するにつれ近代の建築に移っていくというように、時代の流れを肌で感じることができる研修だった。遺跡ばかりのローマから装飾の激しいシエナ大聖堂を見て、そろそろ華やかな教会建築に飽きてきたところで、フィレンツェで、装飾と色彩をあまりきらびやかにせず、シンプルな形の力をダイレクトに伝えるルネッサンス建築を見て、とても新鮮に感じ、



ゲーテアヌム

古代・中世建築に飽きてきたところで、フランスのル・コルビュジェの今までの様式を打ち崩した近代建築を目の当たりにし、思わず鳥肌が立つほど感動し、旅全体を通して見ると、とても充実した研修だったと思う。特に、ロンシャン礼拝堂のあんなにやさしく柔らかく入る光は、今までに見たことがないので感動した。ル・コルビュジェは光のマジシャンであり、抽象絵画の建築家だと思つづく。建物だけではなく、町並みにも感動した。

外国の町並みは色が暖色系で統一されていて、町にまとまりがある。そして、その暖色系の壁の窓に咲いていた赤い花が、軽やかなアクセントになっていて、今でも鮮明に脳裏に焼き付いている。家の一軒一軒は個性がないのだが、一つのまちとしてはとても個性がある。例えば、花の都フィレンツェ、水の都ヴェネチア、芸術の都パリ、霧の都ロンドンといったように、そのまちを飾る言葉がある。逆に日本は家の一軒一軒は個性があるのだが、町としての個性が薄いような気がする。どっちが良いとは簡単にはいえないが、色彩の統一があれば心落ち着かせるとは思わなかった。

また、町並みをよくするのは、建築の力だけではないということがつづくわかった。パリの地下鉄でバイオリンの音色が聞こえてくると、一気に雰囲気が変わり、ちょっと極端なのだが、冷たい灰色の壁からまるで花が咲いてくるように感じるくらい気持ちが明るくなった。思わずチップをあげてしまった。ヴェネチアのサン・マルコ広場での夜の音楽は本当に素晴らしく、音楽が人と人とを結びつけて輪を作っていた。そこには国境がなかった。音楽の影響力は、建築のそれに勝るのかもしれないと思った。

今回の研修を終えたとき、ある一つの大切なことに気がついた。それは、日本独特の個性の大切さだ。日本の良いところを見つめ直し、その上で、外国の良いところを取り入れ、新たな文明を作ることが今の日本に必要なと思った。

旅行から帰って

平田真貴（3年）

せっかく旅行に行ったのだから、見た物

のことを振り返ろうと西洋建築の本を読むことにした。結局、ばらばらと写真を見るかたちになってしまったが。しかし、あることに気がついた。実際に見ていない物の写真は今までと変わらず、「おおー、建築物」といった感じだが、見た物の写真だと、その場所で自分がなにを感じ、友達とどのように戯れたかが一気に自分の中に流れ込んだ。その写真に写っている面としての建築物だけではなく、その中身、また周りの風景のビジョンまでもが見える。自分は、行った。ちゃんと確信がもてた。

写真で見ていたときは、その建築物がなにかとつもなく大きな存在だったが、実際に見に行き、そして帰ってきてから見ると、印象が全然違う。なぜだろう。

それはきっと、建築物という物を見ていたのが、その場に行くと、周りの風景を感じ、そこでの人とのつながりを感じ、建築物だけではなく周りの融合された空間を感じられたからだと思う。基本的なことだとは思いますが、建築はその物ができて完成ではなく、人が使ってその土地に根づいて完成する。それを、今回の研修旅行で実感できた。



感謝と希望を覚えて...

美寿見知栄（3年）

この研修で、私は大変多くのことを学びました。海外で初めて建築に触れた私は、自分の知識のなさ、世界の広さを思い知りました。

この頃、自分の中で建築において多くの悩みを抱えながら、私はヨーロッパへ旅立ちました。しかし、各地をまわるうちにその悩みは建築への疑問と変わり、そして私のこれからの希望へと変わりました。

それぞれの国には、各文化があり、土地

の特性があり、そして建築にも各価値観があるのだということにまず始めに感じました。日本の中でのみ建築を見てきた私は、その日本の尺度でしか建築のことを考えられなかったことに後悔し、新たな目をもつことができたような気がします。

建築以外のことで多くのことを学べたと思います。この研修に行く上で、日本以外の国での大学や、教育に関する一般の考えについて興味があった私は、それらを知ること目的のひとつでした。その土地のガイドさんから話を聞いてみると、同じヨーロッパでも国によりかなり異なることを知りました。それらと比較して日本で学ぶ

私たちはよい状況だということを知り知らされました。

私の感じた感動、疑問をここで語りきることはできませんが、この研修に行くことを強く勧めてくれた両親、より旅を楽しませてくれた先生と仲間たちに感謝の気持ちを伝えたいです。

これからさまざまな壁にぶち当たるとは思いますが、この旅を経験したことで、以前より乗り越える力と勇気を身につけたと思います。今は、自分のおかれている環境に感謝し、それを結果に残せるようがんばりたいです。

これからの私と建築の将来がとても楽しみでならない今日この頃です。

海外研修を終えて思うこと

戸塚浩樹（2年）

この旅行、最初はあまり行きたいとは思わなかった。旅行の申込み直前に一緒に行くはずだった友人達が次々とキャンセルして、友人は一人だけになってしまった。自分の性格上、旅行先で友人ができると思っていなかったため、自分の勉強のためと決めていた。実際、勉強のための旅行であったが、それだけではなかった。たくさんの友人ができ、先生とも親しくなることがで

きた。それだけでも十分満足のいく旅行だった。それに加えて、すばらしいヨーロッパ建築や街並み、空の色も違っていた。この旅行に行く前に、毎日、課題やテスト勉強に追われて、精神的に疲れていた気がする。どれだけがんばってもゴールが見えない気がして、大らかな設計の授業も自分が何をやりたいのか、自分に建築家としての才能はあるのだろうか、と毎日考えていて、自分を見失っていた気がする。自分は、建築を学ぶ人間としてヨーロッパで何かきっかけをつかみたかった。そして、そのきっかけがこの旅行を通してつかめた気がする。町をぶらぶら歩くだけで目に入る全てのものにすごい衝撃を受けた。まるで、ついさっき生まれたばかりの子供のような目や耳や脳で、そこにあるものを体験することができた。

一日一日がとても濃度の濃い時間を送ることができた。そして、自分の知識のなさや、ヨーロッパの建築家達の芸術性の高さ、改めて考えさせられた。やはり、自分はまだまだ未熟だと思った。まだ建築を語ることなんてとてもできないと思った。でもそれがうれしかった。いい意味で打ちのめされた。

この旅行を通して、人間関係の面でも、自分の財産がたくさんできた。友人達との話が色々な勉強になった。

この旅行で得た友人や知識や思い出が将来、自分の人生にとって大きな財産になると思う。一生忘れられない思い出ができた。

そして、日本を考える

原 寛武(2年)

日本を離れること3週間。文化の違いを体験した。言葉に戸惑った。夜のヴェネチアに酔いしれた。ワインで酔った。歩き疲れた。楽しくてしょうがなかった。つらい目にもあった。かけがえのない友達ができ。エスカルゴがうまかった。ヨーロッパの街並みって何であんなにきれいなんだろう。街全体が人にやさしい。障害者やお年寄りにやさしい。駅には階段が少なく、エスカレーターなどの設備がきちんとしているし、バスの乗り口にもステップが少ないなどの配慮がうれしい。公衆電話や自動販売機は、街にとけこんでいる。決してパラパラに個性を強調したりしない。そりゃ、確かに治安は悪いかもしれない。でも、人はあたたかい。迷っていれば道を教えてくれるし、食事のときは、楽しんでいるかた

ずねてくる。

イギリスは日本と同じ島国だ。大きく違うのは、根本的な考え。ヨソ者は受け入れられないという村意識のようなものを持ち、排他的である日本。人間それぞれ違って当たり前と開き直り、受け入れることを拒むことのなかったイギリス。日本を嫌っているわけではない。ただ、国際化や個性を模倣と勘違いする姿勢が気になる。

今回、数多くの優れた建築物に出会えた。中でも、コルビュジェが設計したロンシャン礼拝堂とサヴォア邸は、中に入って空間を実感することにより、そのすばらしさにただ感動するのみだった。本を読み、写真を見て、図面をトレースしてみたところで、きっとわからない。「コルビュジェのどこがすごいんだ？」って一生言いつづけるところだった。感動したから、じゃあ日本にも同じものをつくろうとは思わない。これから日本も鉄、ガラス、コンクリートの時代だと考える前に、日本についてよく考えたい。今回の旅はそのきっかけを与えてくれた。

感動の22日間

米嶋隆彦(2年)

飛行機に乗ること15時間、着いた所はスウェーデンのストックホルム。この国のことは、今でも鮮明に覚えている。それは、私が日本以外で初めて足を踏み入れた国だからだ。街並み、人、水、空気、木や雑草の一本一本まで、目に写るもの全てが新鮮で、そのときの感動はとても言葉では言い表せるものではなかった。

次に行ったイタリアは、滞在期間が最も長く、そして最も充実した日々を過ごすことができた国だった。ローマでは、今までテレビや雑誌でしか見ることができなかった建築物を初めて間近で見ることができ、フィレンツェでは、路上演奏をしていたサックスの音に酔い痴れた。ヴェネツィアでは、ゴンドラに乗り、すばらしい歌とアコーディオンを聞きながら美しい夜景に心を奪われ、鳥肌が立つほど美しい朝日に出会うことができた。イタリア、近いうちにもう一度訪れようと心に決めている。

フランスでは、凱旋門を見て、本場のフランス料理を食べた後、エッフェル塔に登った。エッフェル塔の最上階は非常に寒かったが、パリの夜景にタンクトップ1枚で興奮していた。

フランスには、ルーブル美術館やヴェルサイユ宮殿などの古い建築物もあるが、サ

トラス駅などの近代建築物が多く存在していた。フランスに着くまでは、古い歴史のある建築物ばかりを見ていたので、今までは少し違う角度から近代建築を見ることができたと思う。

スウェーデンから始まりイギリスで終わったこの旅、とても充実した3週間を過ごすことができた。

研修旅行で得たもの

吉崎友里子(3年)

建築の勉強を始めて2年半が過ぎました。最近、自分がどれ位建築を理解している、この先何をしたいのかなど、答えが出せなくなっていたので、この旅行で何らかの形で答えが出せたらいいなと思いながら、22日間を過ごしました。私にとって、毎日毎日建築のことを考えて、建築物に接するということが初めての経験です。2年生が大半を占めているという環境は、初心に戻って建築を見つめる機会を与えてくれました。また、先生や3年生と建築について語るにより、頭の中で整理しきれなかった感動や考えを言葉で表現することができたと思っています。

「名建築と言われている建築物の形に無意味なものなどない」ということを設計製図の先生に教えられ、設計を通してそのことを学んだつもりだったし、理解しているつもりだったけれど、コルビュジェのサヴォア邸を見て、大きなショックを受けました。プランやコンセプトは後からついてくるのではなく、これらがあって初めて形が生まれるということが説明を聞きながら体験したような気がします。サヴォア邸のことももっともっと知りたいからもう一度サヴォア邸に行きたい!

今まで、日本の建築を差し置いて、ヨーロッパの建築ばかり評価して憧れてきたけど、多くの国を旅したことにより、日本の建築の良さも見えてきたような気がします。それぞれの国によって違う空や緑の色、水の存在感、気候などによって建築が与える印象は全く違うことに気がつき、その国らしい建築の印象があることがわかりました。日本には日本らしい建築の良さがあり、ヨーロッパだって、北と南では建築から受ける印象が全く別であるように、国によって異なる良さがあるということに気が付きました。その良さが具体的にはなんなのか勉強不足の私にはまだわからないけど、この旅行で私は確かに何かを得たと感じています。

卒業研究ガイド

3年生までは建築の基礎を幅広くしっかりと勉強し、あまり早急に専門分化しないほうがよいとわれわれは考えています。しかし、大学生活の最後を迎える4年生は、各研究室に所属して、一つの研究テーマに取り組み、それを掘り下げることとなります。そして先生方と膝を交えて話し合い、就職や大学院への進学相談、大学院生との交流などを通して、教室では望めない人間的なふれあいと相互のコミュニケーションを得ることによって、建築学生にふさわしい実力を蓄え、かつ大学生活の最も有意義な思い出が作り出されるものと考えています。

3年生諸君は4月からの卒業研究着手に向けて、以下のような各研究室の卒業研究テーマや、1999年4月の『駿建』にのっている昨年度の卒業生の就職動向などに目を通して、自分が4年生になってやってみたいことをよく考えておくことを希望します。

斎藤 公男（建築学科教室主任）



審査風景

平成12年度 卒業研究テーマ一覧

以下の研究テーマは、建築学、企画経営両コースの学生が自由に選択することができる。（計：計画系，構：構造系，50音順）

構——— 安達俊夫教授・山田雅一助手（433-A・B号室）



卒業研究テーマ

本研究室は、建築に関連する地盤工学および基礎構造を主な研究対象としている。

平成12年度の卒業研究は、次の6つのテーマを計画している。

1．砂地盤の液状化特性に関する研究

液状化特性に与える地震動の2方向入力の影響と液状化発生時の地震動の強さについて、地盤系オンライン地震応答実験法により検討する。

2．改良地盤の強度・変形特性に関する研究

セメント系改良土の強度・変形特性について、中空ね

じりせん断試験により検討する。

3. 締固め改良地盤の地耐力評価に関する研究

ゆるい砂質地盤を静的締固め砂杭により改良し、直接基礎の支持地盤とする複合地盤の設計法について検討する。

4. 急速平板載荷試験の有効性に関する研究

簡易な急速平板載荷試験から地盤の支持力、変形係数、荷重～沈下関係を求める方法について検討する。

5. 粘性土地盤の動的強度評価法に関する研究

原地盤のシルト・粘性土の動的物性のデータを蓄積するとともに動的強度の評価法について検討する。

6. 建築基礎構造の限界状態設計法に関する研究

基礎構造の設計基準が、従来の許容応力度設計法から限界状態設計法に移行しようとしている。限界状態設計法の内容を基礎構造の設計例を基に理解する。

上記テーマについて、標記教員2名と大学院生5名が協同して指導に当たります。

卒業生の就職傾向

卒研究生の就職先は、他の研究室と同様に建設業と住宅産業が大半である。ここ数年の大学院生は東京電力の建設部、大手建設会社の技術研究所や構造設計部、東京都庁の建設局等に就職している。

構———石丸辰治教授・新谷隆弘講師（454号室）



卒業研究テーマ

1. 効地 震性能設計法に関する研究

2. 制震(振)構造の実用化に関する研究

建築物にとって芸術性、機能性は日常生活を保持する上で非常に大切なことであるが、その大前提としてまず第一に大切なことは人命を守るシェルターの役割を果たすことである。先の大震災では、6千人以上の尊い命が一瞬にして失われた。また建築構造物をはじめとする社会施設の復旧には、莫大な費用と長い時間がかかることを改めて認識させられた。これを受けて建築基準法が現在の仕様規定から性能規定（構造物の性能を明示した設計法）に改正されようとしている。この新しい設計法をエネルギー論の立場から整理し開発すること、またそれを実現するための新しい構造部材を開発すること、これが本研究室のメイン・テーマである。

また地震災害発生時には、社会全体の活動が停止するため、怪我をしても治療が受けられないとか、情報網や交通網の破壊により被災地からの脱出や救援活動もでき

なくなるという状態になることは記憶に新しい。

1次災害はもちろん、このような2次災害を軽減するという意味でも、従来の構造物とは設計思想を異にする免震・制震構造の開発や普及は急務である。本研究室では、その設計法やデバイスの開発もテーマの一つとしている。

卒業生の就職傾向

構造設計事務所、ゼネコンの現場・構造設計部・技術研究所等への就職が多い。また、官公庁・建設コンサルタント会社、あるいは、鉄道・電力会社の建築部門に就職する者も増えつつある。

構———岡村武士助教授（946号室）



大型構造物試験棟に建築学科から出向して管理・運営と実験の指導にあたっている。研究スペースは駿河台をベースとし、化学と構造デザインとの領域に関わる研究が、本研究室の特徴。いずれのテーマも“ものづくり”が基本で、成果はデジタル・データ化し、CD ROMで作成する。

八海山の夏合宿が定番、積極的に楽しく真剣に取り組む学生を期待している。

1. ホタテ貝殻を利用した構造部材の技術開発と評価に関する研究

<Key Word> 貝殻 曲面構造 有機物

2. 建築構造工学に関する研究

<Key Word> A. ガウディ ピラミッド フォルム

3. 実大構造物試験の評価に関する研究

<Key Word> 試験機 制御システム 実験

計———片桐正夫教授・大川三雄助手・重枝 豊助手（587-A・B号室）



各自がすでに興味ある研究テーマを提起することを歓迎する。当研究室が今取り組んでいる課題を参考にし、この中より選択、研究に参加すること。

1. 「日本建築の伝統を探究する」研究（例えば、空間構成、意匠、機能などについて）

2. 近世社寺建築の計画、意匠、技術の調査研究（日本

の建築の近代化へのメカニズムを解明)

3. 歴史的建造物, 町並み, 環境の保存と再生に関する実践的研究 (特に, 活用の具体的提案について)
4. 近代の市街地住宅および宅地開発の発展経過と形態に関する調査研究
5. 東南アジア (特にアンコール遺蹟・ベトナム建築など) のフィールド・ワークと調査研究
6. 中国, 朝鮮の建築に関する研究

自主的に研究をすすめる強い意志と行動力のある人物が望ましい。研究の性質上, 資料収集や読書に対し, アレルギーのある者は不適格であろう。

なお, 卒業研究着手の条件としては, 海外研修旅行 (韓国, または東南アジア) に参加できることと, 近代・日本・西洋建築史のうち, いずれか2科目の単位を取得していなければならない。

計————— 木村 翔教授・井上勝夫教授・橋本 修講師
(583-A・582-A号室)



建築の目的は, 快適な居住空間の創造にある。建築の空間性能に係る多くの要因の中で, 人間の感覚に直接影響する音・振動環境の問題は, 近年の生活水準の向上に伴い, ますます重要な検討課題となっている。

当研究室では, このような建築に対する社会的要求を踏まえて, 現象を物理的に捉えるだけでなく, 感覚面からのアプローチ, さらに人間工学にまで及ぶ広範囲な視点から研究に取り組み, 総合的な建築物の音・振動環境性能の向上を目指している。

卒研テーマ

1. 集合住宅の音・振動環境性能に関する研究

この研究は, 集合住宅内の音環境および床の振動環境性能の向上を実現することを目的としたものであり, 具体的には次のようなテーマが考えられる。(1)床衝撃音の予測方法と評価,(2)戸建住宅の遮音性能の向上,(3)界壁・外壁の遮音性能の向上,(4)住宅の床のかたさ感覚と居住性能。このうち(4)のテーマは, 居住床のかたさを歩行感などの面から, 人間工学的に研究し, 今後の住宅の床構造仕様を提案しようとするものである。

2. 集合住宅の音環境と居住者の評価に関する研究

都市生活の中では外部騒音が居住環境に影響する大きな要因の一つとなっている。本研究では, 居住者の意識調査・分析を通して, 居住者が日常生活の場で経験し, 認識している問題を明確にし, 居住環境として適切な音

環境を, 周辺住環境との関わりの中で把握していくことを目的としている。

3. 商業空間の音環境に対する評価に関する研究

都市生活者は, 駅, 空港などを含め, 日常, さまざまな商業空間に接している。利用者はそれらの音環境をどのように評価しているのか, 音環境に対する利用者に共通したイメージファクター, 現状における問題点は何かなどについて分析するとともに, オーナー側の立場から, 商業空間の音環境づくりについてどのように考え, どのように取り組んでいるのか実態を把握し, 各種商業空間の音環境についての総括的な検討を行う。

4. 作業環境騒音の人体への影響と評価に関する研究

建設工事現場のように, 高レベルな騒音に曝される作業員の聴力保護, 作業場の環境管理は, 労働市場の国際化に伴い重要な課題となっている。本研究は, これまで十分に整理されてこなかった作業環境の現状を把握し, その実態を明らかにして評価法の体系化をはかるための研究を行う。

5. 子供の音環境に関する研究

成長期にある子供達にとって, 聴覚系を通したいろいろな体験は, 将来に対して重要な意味を持つ。本研究は, 学校建築を中心に子供の音環境としてあるべき姿を実態調査およびヒアリングから検討し, 建築の設計にフィードバックして, 今後の学校建築について考える。

6. 公共・都市空間における音声の明瞭性評価に関する研究

大空間や駅, 地下街など公共空間における音声アナウンスは, 利用者に対する情報伝達手段として大きな役割を果たしている。本テーマは, 建築空間における残響やエコー, 騒音などの音響障害が, どのように音声の聞き取りに影響を与えているのかについて検討し, 明瞭性を高めるための建築空間デザインや, アナウンスの方法, 電気音響拡声システムの設計法などについて提案を行う。

7. ホール音場の評価と予測に関する研究

豊かで良好な響きが求められるホールなどの室内音場の評価を行う場合, 音量, 音質とともに空間印象が重要なパラメータとなる。これらの要因について, 音響測定, 聴感による音場評価, 音場予測のそれぞれの面から総合的な検討を行うことが必要である。

具体的な研究テーマとしては, (1)音の到来方向に着目した三次元的な音場計測と立体音場再生による音場評価, (2)音場合成手法を用いた音場再生・評価などが挙げられる。

8. CGを用いた室内音響設計に関する研究

ホールや会議場, 大規模イベントスペースなどさまざまな空間の音響設計について, コンピュータ・シミュレ

ーション手法を活用し、CGによるヴィジュアルな表現を積極的に用いながら、わかりやすく実際の室内音場の表現や空間印象に基づくホール空間の設計・評価法について研究を行う。

9. 建築における電磁環境に関する研究

目に見えず、感覚で捕らえられない電磁波（周波数が数10kHzから100GHz程度）は、電子機器の誤動作や通信機器の混信、さらには生体への影響までが懸念され、建築分野でも無視できない状況になってきている。建築物内でもその影響は大きく、シールド技術の検討や材料の開発等が活発に行われている。本研究では、電磁波の物理的な面の基礎的考察、建築物内の実態把握、シールド技術などについて検討する。

就職の状況

本研究室では伝統的に大学院生、卒研究生と教員との綿密な就職相談を実施しており、意欲的な学生諸君の活発な就職活動を支援している。卒業生は、建設会社、住宅産業、設備会社、建築設計事務所、公的な建築試験センター、音響コンサルタント事務所などで幅広く活躍している。

計——小嶋勝衛教授・根上彰生助教授
・宇於嶋勝也講師（577-A・B号室）



本研究室では、研究テーマとして地区レベルから都市レベルを対象に、以下のような視点を設定している。

1. 歴史 都市計画史, 都市計画法制史, 都市形成史
2. 調査・解析 都市調査法, 土地利用解析, 地域構造解析
3. 計画 都市空間の高度利用（空中権）, 伝統的景観の保全, 既成市街地の再整備（商店街の再開発・インナーシティ問題等）, 居住環境整備
4. デザイン 都市設計, 都市景観調査・解析・計画
5. その他 住民参加, 都市開発事業, 不動産に関する事業・制度の検討, 環境・防災都市に関する研究, etc.

これらの中から、現在または近い将来での都市計画上の課題をふまえ、数回のミーティングにより各自の具体的な研究テーマを設定する。研究は個人またはグループで進める。

なお、次の科目はぜひ取得しておいてほしい。

「都市計画」「建築法規及び行政」「建築設計」、その他、テーマによっては「建築史」「統計学」等の科目が、または外国語の語学力が必要な場合もある。

構——斎藤公男教授・黒木二三夫短大講師
・岡田 章助手（439-C号室）



研究の視座 空間構造のめざすもの

- 構造という力学に裏付けられた技術の世界と、造形という人間のゆれ動く感性の世界を結ぶものは何か。
 - 構造には本来、安全性と経済性の確保という大役が課せられている。一方、新しい建築空間をきりひらくという創造的役割のあることを、歴史のあゆみは物語っている。空間構造の今日的な役割は何か。
 - “力と形”が結晶した秩序ある自然界の形象は空間構造の原形。釣合形態と立体的な構成システムから生まれる合理性は、大スパン架構の有力な手がかりとなる。
- 基本テーマ

「空間構造に関する研究」

- 空間構造による大スパン建築の構成を試みる。
- 新しい素材の特性を踏まえながら、空間構造システムを創出する。
- 構造特性を理論・解析と実験の両面からとらえ、設計基本データを蓄積する。
- 実際の構造物の性能を確認し、理論と設計・施工との接点をさぐる。
- コンピュータや実験を利用した空間構造の性能解析手法を開発する。
- CG、CADによる空間構造の企画設計支援を、構造計画画面から展開する。
- 多くの人々が楽しさや安らぎを共有できる‘つどいの空間’を研究や実例を通して感じとる。
- 構造教育へのフィードバックを試みる。

2000年のテーマ

- (1) テンション材料（ケーブルと膜）を利用した空間構成
- (2) 木質系・アルミ材料による空間構造システムの開発と応用
- (3) テンセグリック構造の開発と応用
- (4) 空間構造の施工計画支援手法の開発
- (5) ポスト膜材料の考案と適用性の検討
- (6) 空間構造の歴史と現況
- (7) テンポラリー・スペースの考案

(8) 構造教育用教材およびソフトの開発

研究室の横顔

- “よく学び、よく遊ぶ” は研究室のモットー。テニス、スキー等もスポーツカ学で上達したいところ。
- 合宿、OB会、現場見学会等を通じて、タテ・ヨコのつながりを。他を知り、そして自らを磨く。

構————— 清水五郎教授 (駿439-A号室)



当研究室では、主として建設材料と施工に関して、物性の検討や品質評価をはじめ、新素材や新工法の開発等を目指して研究を推進している。課題についてこれまでの実施例を示せば、以下のようなものである。なお、大学院進学希望者の着手を歓迎する。

卒業研究テーマ

1. アンコール遺跡の保存に関する材料学的検討*
 2. 低層RC造住宅のプレハブ化に関する研究*
 3. コンクリートの吸水性状に基づく品質の評価法に関する実験的研究
 4. 表面処理による木材の耐火・耐久性向上ならびに人工木材に関する基礎的研究
 5. 建築物の防汚に関する研究
 6. 新素材の用途開発に関する研究
 7. その他
 - 1) 新素材と新工法に関する調査と評価
 - 2) 特許申請の実践
 - 3) 自主テーマ等
- *は「卒業制作」と連携することができる。

構————— 白井伸明教授・森泉和人助手 (駿431-B号室)



本研究室は、標記教員2名と大学院生5名の構成で、鉄筋コンクリート構造物に関する以下の研究テーマに取り組んでおります。

- 1) RC造骨組建物の高精度3次元動的応答解析モデルの開発
- 2) 地震荷重を受けるRC造骨組建物の損傷解析法に関する研究
- 3) RC構造物の強度・靱性・抵抗機構に関する破壊力

学的研究

- 4) RC構造物の非破壊検査法および補修・補強技術に関する研究
- 5) コンクリート廃材を用いたリサイクル材料に関する研究

また、本研究室を窓口として、清水泰先生(東工大付属高教諭)の研究テーマも選択できます。いずれも難しいような研究テーマ名ではありますが、今後ますます重要性が増す研究内容であり、力学系の学科目に興味のある学生にはやりがいのある卒論テーマになると確信しております。一方、本研究室では、学科LANの構築・整備等にも力を入れており、“ひとのために汗を流す”ことのできる学生の来室を期待しております(コンピュータに関する予備知識は不問、心身ともに健康であること)。

卒業生の就職状況について

就職を希望する学生にとって特に厳しい一年間であったが、大学院生も含めて本年の就職先は建設会社(5)、住宅(1)、設計事務所(1)、情報(1)、進学(3)という結果であった。

計————— 関口克明教授 (駿967-B号室、船622-B号室)



研究内容

日常生活における快適な空間を創造することは、建築計画上の基本的な設計指針のひとつである。空間性能をいわゆる設計者のセンスで十分に生かすためには、環境工学的な要因を総合的に把握して設計の中で具体化することであり、環境情報の定量化と合理的な環境計画への応用は質の高い建築空間の創造に欠かせないものである。そのためには環境要因の的確な計測と評価、さらに設計・予測手法の確立が望まれます。

当研究室では音・光・熱環境に関するテーマを扱っていますが、吉野・羽入研究室(住環境総合評価、環境工学とバリアフリー計画等)と共同で環境・情報研究室として活動しております。また、ゼミ活動の一環として色彩・照明の勉強会を実施しております。

卒業研究テーマ

[音環境]

1. コンピュータシミュレーションによる室内音場の予測と3D音場再生システムによる建築計画への応用
2. 騒音分布の予測と環境アセスメントに関する基礎的検討
3. 超縮尺音響モデルによる室内音響設計手法の検討

[色彩・光環境]

1. 建築空間における照明・色彩計画に関する研究
2. 各種生理量の定量化による空間認知に関する研究

[複合環境]

1. 高気密・高断熱住宅における複合環境の評価に関する研究

そのほか、環境工学に関する各自のテーマについても相談に応じる。

上記の一連の研究テーマは、心理評価によるデータの統計処理から最新のデジタル技術、マルチメディアの総合によるもので、多くの基礎知識が要求されますが、研究を通して十分に修得が可能であり、日頃より建築計画・環境工学に対して興味と理解のある人にとってメリットが大きいと考えている。研究意欲のある人は大いに歓迎いたします。

計——— 関沢勝一教授・柳田 武講師
・宇杉和夫講師・佐藤直樹助手(579号室)



[関沢研テーマ]

教育施設の研究

- (1)小・中学校における新しい教育空間の研究

将来における教育方法の変化に対応するためには、学校建築はいかにあるべきか、また地域社会の中での学校建築はどうあるべきか、といった観点からその計画条件を研究する。

- (2)障害児のための学校建築の研究

養護学校(知的発達障害、肢体不自由など)の計画条件を文献・観察調査を通して研究する。

- (3)子どもの空間に関する研究

少子社会に対応するために、子どもの遊びや学習の空間を、文献・観察調査を通して研究する。

[柳田研テーマ]

1. 計画・設計におけるCAD・CGの活用に関する研究

- (1)CAD・CGによる設計手法(デザイン・シミュレーション、プレゼンテーション)

- (2)計画・設計におけるネットワークの活用

デジタル・デザイン、VDS、デザイン・コラボレーション、等

2. 計画手法・設計手法に関する研究

- (1)計画・設計情報のあり方とその活用、WWW情報

の利用

- (2)平面計画、配置計画における数理的手法とその応用

3. 企画立案・施設管理(FM)に関する研究

- (1)企画段階における情報の収集・分析・企画立案の手法

(2)FMによる施設の有効な管理・運用とそのシステム
いずれも「建築の企画・計画・設計・製図という一連の流れの中で、いかにコンピュータを活用するか」ということが大きな共通のテーマであるが、これらに関連したものであれば独自のテーマでもよい。

[宇杉研テーマ]

2つのアプローチを可能としました。

資料解釈による実証研究

(自己の資料を作成してから結果・意見を出す)

自分の意見・プランを提案する

(意見・提案を組み立てることを優先する)

いずれにしても現在の文化・建築・生活空間に対して、きちっとした批評の眼を養い、将来の展望を築くことが大切です。テーマとしては、次のものを参考にして自由に発想して下さい。

空間と景観 知覚と心理・認識 住宅・集合居住・都市 日本・アジア・西欧の空間 近代の空間構成 公共施設と地域環境 祝祭・神殿 環境学習空間 公園・広場・芸術 共生社会居住 再開発

具体的・理論的なテーマのどちらでも、自分の目的に積極的に取り組む姿勢を大切に、資料収集の作業や行動を通して研究や提案を行う。研究室の活動にも興味をもち、提案等を通して社会と触れ合うことを重視します。テーマ・進路などよく相談、指導を受けて進めること。

計——— 高宮真介教授・佐藤慎也助手(578-A号室)



私達の研究室では、計画よりも設計を、理論よりも実際の作品を通して建築を学んでほしいと考えています。そして、建築を単なる「もの」としてではなく、それが成立する社会、文化などを包摂する環境の構成要素として捉え、研究を行っていきます。研究テーマは、このような主旨を理解した上で各自が自主的に設定し、指導を受けた上で進めていきます。また、当研究室の性格上、設計に興味を持ち、将来設計を志す熱意のある人を歓迎し

ます。研究室としての共通のテーマは特に設定しませんが、上記の主旨から以下のようなものが例として挙げられます。

設計手法に関する研究

プログラミングから建築創造に至るまでの実証的な例題の研究。

作品分析，作品評論に関する研究

近代建築以降の実際の作品について，その歴史的背景，地域文化的な背景を考察し，作品分析，作品評論を試み，研究する。

建築と風景の構築に関する研究

建築の場所性に焦点を当て，風景の構築の手法を研究し，ランドスケープデザインやアーバンデザインと建築デザインの関係について研究する。

計—————野村 敏教授・石田道孝講師・八藤後 猛助手
(965号室)



野村研 (野村，八藤後)

形態や機能本位に設計されている最近の建築物を，改めて設計の原点に戻り，「人間」(健康な成人・高齢者・障害者を含めて)にとって真に好ましく，かつ望ましい建築物とする方策を探究する。

1. 住環境に関する研究
2. 住生活機器・設備に関する研究
3. 社会福祉施設・リハビリテーション施設に関する研究
4. 福祉のまちづくりに関する研究
5. 安全計画に関する研究
6. 就労環境に関する研究
7. その他，当研究室にふさわしいテーマ

石田研 (石田)

研究室では主に高齢者・障害者など，社会的にハンディキャップを持つ人々を対象に多様な研究テーマに取り組んできた。高齢化社会を迎えた現在，今後とも社会的要請の強い実践的テーマとして以下を設ける。

1. 高齢者・障害者のための住宅改造支援システムの提案
2. 都心における高齢者居住に関する研究
3. 総合福祉施設の今後の展開に関する研究
4. その他に，高齢者社会を踏まえた地域環境のあり方に関する研究

構—————半貴敏夫教授 (432-A号室)



卒業研究テーマ

1. 鉄骨部材の材端補強による塑性変形性能改善に関する研究
2. 鉄骨構造の弾塑性崩壊過程解析
ねじりを伴う塑性崩壊性状の検討
3. 木質構造要素の強度と変形性能に関する研究
4. 雪，氷の力学モデルと補強氷構造建築の可能性

おおよそのところ，実験4割，解析6割のエネルギー配分を予定しています。新年度の研究室スタッフは教員1+大学院6名です。伝統ある日大構造力学研究グループの一員として，「構造力学を楽しむ研究室」にしたいといつも考えているのですが，理想と現実のギャップはなかなか埋まりません。構造の分野でなにかやってみようという夢と意欲のある人を歓迎します。

今年の卒業生の就職先は，住宅2，建設4，設計事務所1，大学院3，その他3という内訳で，建築学科の平均値に似た分布となっています。

構—————平山善吉教授・斉藤俊一助手 (431-A号室)



卒業研究テーマ

1. 木質構造の構造特性に関する研究
2. 南極昭和基地の建物に関する研究
3. 石膏コンクリートおよびアルミナセメントの低温特性に関する研究

研究室

研究室は4号館の3階にある。研究活動は構造実験と解析を主体に活動を進めている。当研究室では「よく学び，よく遊べ」をモットーとしている。

研究内容

当研究室では木質材料のLVL材 (Laminated Veneer Lumber)，集成材を用いた構造物の研究を構造・材料の両面から行っている。特に現在は，LVL材の有効な接合法 (継手・仕口) に関する実験的研究を行っている。

また，日本の南極観測基地の建物に関する研究においては草分け的存在である。昨年度の実験は，筋違い骨組みによる実大構造物の実験を行いLVL材の有効性を示

し、一般建築から南極基地建物にまで応用すべく研究を行っている。昭和基地建物は築後約30年以上も経過し、老朽化している。そんな中、研究室の課題は絶えない。氷床建物の基礎的研究、不燃化木質系による新構造システムの研究、石膏コンクリートを用いた研究等が主な内容である。

上記の他、研究室では電算機を用いた構造設計手法の修得も大きな課題の一つである。その主な目的は電算機を用いた設計手法が多岐にわたっているため、設計における一連の流れをつかみ、構造的センスを養うことにある。これらの演習は、多数のパソコン用ソフトを用い、最先端の構造設計手法の話題も交えながら進めていく。

研究室の就職状況

研究室のここ2年の就職状況は、1.鹿島建設(株)、2.大成建設(株)、3.(株)竹中工務店、4.(株)間組、5.戸田建設(株)、6.積水ハウス(株)、7.大和ハウス工業(株)、8.三井木材工業(株)等のほか、大手建設会社に就職している。

構————— 三橋博巳教授 (581-B号室)



卒業研究テーマ

当研究室では、ゼミで構造から計画まで幅広い多様なテーマについて勉強をした後、個別のテーマごとに分かれて実験や現地調査などをもとに研究を行っている。

研究テーマは以下の通りである。

1. 寒冷地に建つ建築物に関する研究

- (1)極地・多雪地域における建築物の人工吹雪実験によるシミュレーションおよび現地調査
- (2)多雪地域のリゾート開発に関する研究
- (3)建築物の積雪荷重に関する研究

2. 高強度鉄筋コンクリート構造に関する研究

高強度材料を用いた鉄筋コンクリート有孔梁の耐力および変形に関する研究

3. 都市・建築の防災計画に関する基礎的研究

地震・風・雪などの荷重による自然災害と都市の安全性、防災計画に関する調査研究

4. 建築物の寿命・耐用年数・ライフサイクルに関する研究

建築物の寿命実態調査と寿命推計、マンションのストック、維持管理・保全、環境管理、建て替えの調査

研究

5. 不動産の評価に関する研究

建物の評価、固定資産税評価、家屋の税制度などについての調査研究

卒業生の就職状況

平成11年度卒業生は大学院生1名、学部生13名で、公務員2名、不動産関係3名、住宅関係3名、大学院4名のほか、多方面にわたる。

計————— 本杉省三教授・佐藤慎也助手(578-A・B号室)



研究テーマは各自の興味に基づいた申し出により、相談の上で決められる。そのため、自ら進んで考え、行動する学生であることが望まれる。さまざまな事柄に関心を持ち、夢や希望を持って研究を行おうとする気持ちは大切であるが、興味的が絞れずテーマが二転三転したり、できること、できないことの判断ができないような学生は受け付けない。

研究室としては、オペラ、演劇、音楽、舞踊、ショーなどさまざまな舞台芸術・パフォーマンスのための空間について調査・研究をする機会が多く、また、こうした活動を通して、地域文化の在り方や人間生活の問題に関心を持っている。こうした芸術文化活動への関心がないようでは困るし、劇場や美術館などに行ったこともない人では無理だろう。

建物種別でいえば、劇場、コンサートホール、多目的ホール、イベントスペース、地区センター、生涯学習センターなどが挙げられる。こうした調査・研究を行うためには、演出家、舞台美術、舞台監督、舞台照明、舞台音響といったいわゆる演出スタッフとの交流や、観客サービスのスタッフあるいは劇場の管理・運営に関わる芸術家や行政人などとの幅広い交流や活動が不可欠であり、こうした人々のところに出掛け、積極的に話を聞ける行動力がなければならない。

継続して研究を行っているテーマは、以下の通りである。

1. 劇場およびコンサートホールに関する研究

- (1)舞台空間の使われ方
- (2)ホワイエ内の観客サービス機能
- (3)客席の構成とデザイン
- (4)フレキシブルな上演空間の可能性
- (5)舞台美術デザインと劇空間

2. 公共文化施設に関する研究

- (1)地域文化施設の利用内容・実態
- (2)練習施設利用者の文化活動
- (3)特色ある地域文化活動と施設

管理者や利用者のそれぞれの立場から見た地域文化施設の現状と今後の在り方を調査、研究する。

3．野外劇場施設

4．祭りの空間に関する研究

5．現代芸術のための空間に関する研究

その他、各自が興味を持っている具体的なテーマがあれば相談に応じる。

計————— 吉田あきら教授・蜂巢浩生助手（453号室）



吉田研究室は、建築設備、温熱環境（温・湿度分布、気流、温冷感など）、環境複合などを主な研究内容としている。

これまで卒業生の多くが設備会社、設備設計事務所、建設会社や設計事務所の設備部門等に就職しているが、この分野は地球に優しくアメニティ豊かな未来の高性能建築を支える技術の中心であるため、今日も求人他分野よりは多い。しかし、不況による他分野からの転向組も多く、応募者は急増しており、競争率の高さは今年も続くと思われる。

女子の技術系総合職も制度としては定着しているが、これも競争率は急上昇しており、男女を問わずプロへの指向と適性を厳しく問われる傾向が 99 年度も顕著であった。

卒業研究のテーマは、研究室の継続課題である

- 1．身体障害者等の温熱環境に関する研究
- 2．実験動物施設の環境制御に関する研究
- 3．温熱環境の数量的評価に関する基礎的研究
- 4．地球に優しい総合環境システムに関する研究
- 5．設備意匠の研究

が中心となる。

身体障害者はしばしば体温調節などの温熱環境への適応にも障害を持つが、本研究室は過去24年間の研究実績をもとに、高齢者・病弱者・障害児などへも対象を拡大しつつあり、また国際研究協力の推進力としても期待されている。温熱環境の数量的評価基準についても、幅広い個人差に対応しうるものを検討中である。

実験動物施設については、本研究室はその基準の充実や体系化に環境工学の分野から中心的役割を果たすべき立場にある。地球に優しい総合環境システムに関

する研究は、断熱性に優れ夏涼しく冬暖かい中国の伝統的地下住居窯洞（ヤオトン）の現代適用を図る、中国西安建築科技大学との共同研究が、次年度以降も続く。設備意匠に関する研究も一層の発展を必要とする。

他に空気清浄度に関する研究を希望するものは国立公衆衛生院への出向が可能であるが、受講計画には十分な余裕を必要とする。

研究の継承発展のため、大学院進学希望者を歓迎する。また国際協力体制の強化のため、語学に優れた卒研生・院生候補も2～3名は欲しいところ。自主テーマは、当初から本人に十分具体的な計画が認められるものに限る。

計————— 若色峰郎教授・渡辺富雄助手（966号室）



私達の研究室では、建築の設計と計画の関連の中で建築空間や都市空間をとらえることを研究の主軸にしているので、建築の設計に興味をもち、熱意のある人を望んでいる。

卒業研究は、その性質上、各自の研究に対する意欲と発想、自主的な活動によって成り立つものと考えている。したがって、研究テーマは各自の申し出に対し、指導を行った上で決められるので、テーマに対する視点や具体的な進め方等について関連する資料を含めて提示してほしい。

これまで研究室で行っている研究テーマは、次の通りである。

1．スポーツ・レクリエーション施設に関する研究

施設タイプ別にみた、施設の利用・使われ方などの実態調査を通じた新しい施設像の研究および文献資料をベースにした研究。

(1)広域圏のスポーツ・レクリエーション施設の研究

(2)地域の公共・民間のスポーツ施設の研究

2．生涯学習関連施設の研究

地域社会の中で生涯学習施設はどうあるべきか、施設系別に、管理者や利用者などの立場からみた現状や在り方についての調査研究。

3．建築空間の計画・設計手法の研究

具体的な作品や作家を例題として、その成立背景を踏まえて、分析・考察を試みる。

短期大学部建築コース所属研究室

以下の研究室では、建築学科教室の承認を得た上で、卒業研究の指導を受けることができる。

構——岡田 満助教授（駿333号室，船926-A号室）



研究内容

当研究室は、鉄筋コンクリート（RC）構造およびプレレストレストコンクリート（PC）構造の研究を対象としている。

卒業研究テーマ

1. PC架構の復元力特性に関する研究

PC造の建物は通常、柱、壁をRC造とし、梁をPC造としている。この梁が構造体全体の履歴性状に及ぼす影響について検討する。

2. RC構造物の柱、梁接合部の破壊性状に関する研究

地震力が作用するRC架構の接合部では隣接する柱と梁から大きなせん断力が導入されるので、靱性の高い復元力特性を得るための十分な補強が必要である。また、接合部は柱、梁に比べて補修が困難なため、破壊を避けねばならない。本研究では、柱、梁接合部の破壊性状を実験的に検討する。

計——小石川正男助教授・田所辰之助助手
（駿333号室，船546-B号室）



卒業研究テーマ

1. 建築設計競技（デザインコンペ）を通じての創作，設計活動

2. 建築設計競技に関する史的研究

3. ヨーロッパ近代建築史および近・現代建築論

主に設計，デザイン活動を中心としながら、建築論、建築史の分野について学習する。上記の3つのテーマのうち、1.を共通とし、2.および3.から一つを選択して卒業研究のテーマとする。設計、研究活動に熱意をもって取り組めることを条件とする。

構——下村幸男教授（駿333号室，船926-C号室）



卒業研究テーマ

地盤と構造物の動的相互作用に関する諸問題

人と人の関わり合いにはうまく表現しきれない相性の問題があるように、建物と地盤との間にも相性の問題がある。ただし、人間関係とは逆に、あまりそり（性質）が合うのは好ましくない。

地震時の建物の挙動は、建物自体の性質のみならず、建つ地盤の性質に大きく依存する。両者の関わり合いを地盤と構造物の動的相互作用と呼んでいるが、正直、ちょっと取っ付きにくい難しい分野（あるいは人間？）のためか、今まで殆ど希望者がいない。しかしながら、近い将来の耐震設計は、この相互作用を無視して成立しないものと思われる。相互作用を考慮すれば、建物の固有周期は延び、減衰は増し、一種の免震構造と似た効果が期待できる。これは、考慮の有無に関わらないことであるが、的確に考慮すれば、より合理的な設計が可能となる。

本年は、煩雑な計算を極力避けた簡単な数学モデルによる相互作用解析コードの確立を目指す。

構——内藤正昭講師（船926-B号室，駿333号室）



研究内容

南極昭和基地の観測用建物の下部構造部材として、アルミナセメントコンクリートが打設されて約35年が経過している。当研究室では昭和基地から持ち帰ってきた骨材を用い、低温環境下で打設・養生されたアルミナセメントコンクリートやアルミナセメントを用いた鉄筋コンクリート梁の力学的特性について、実験的研究を継続して行っている。

卒業研究テーマ

1. アルミナセメントコンクリートの低温環境下での強度に関する研究

本年度は、昭和基地の建物建設時期の気象条件（0℃）を大型低温室内に再現し、昭和基地から持ち帰った総ての材料（アルミナセメント・骨材・混練水）を用い、打設および養生した鉄筋コンクリート梁の曲げ・剪断強度について実験的研究を行う。

また、アルミナセメントや低温環境下でのコンクリートに関する論文調査を行う。

2. 木質構造の構造システムに関する研究

これまでの昭和基地建物に用いられている、木質系プレファブ建築のシステムに関する研究で、平山研究室と共同研究を行っていく。

【構】———中山 優助教授（船545-B号室，駿333号室）



研究内容

当研究室は、鉄筋コンクリート（RC）およびプレストレストコンクリート（PC）の分野を研究対象としている。

卒業研究テーマ

1. 開口PCはりの研究

本年は補強方法、連続開口などについての研究を行うほか、実大試験体について総合的な加力実験を行う。

2. プレキャスト部材の接合に関する研究

最近ではプレキャストの利用、特に場所打ちとプレキャストを一体化して用いるハーフプレキャストの利用が急増している。この両者の結合にはコッターと結合筋が用いられるが、結合鉄筋の力学的挙動についてはなお不明の部分があり、また、接合面のコンクリートのせん断伝達機構に不明の点があるので、主に実験的研究を行う。

3. プレキャストPCの柱接合部に関する実験的研究

地震時の挙動に関する接合部の弾塑性性状を実験的に調べ、プレキャストPC部材の履歴復元力特性のモデル化を行う。

【構】———横山 清教授（駿333号室）



研究内容

主としてコンクリートの初期性状（材齢3日以内）に関する実験研究を継続して行っている。

卒業研究テーマ

1. コンクリートの初期ひびわれに関する実験研究

超高強度コンクリートの初期ひびわれに関して、拘束コンクリート板を用いて実験を行い、ひびわれの発生状況を測定する。

2. コンクリートの初期収縮に関する研究

高流動コンクリートの自己収縮に関して、セメントの種類、水セメント比、混和材の種類の影響について実験検討する。

【計】———吉野泰子助教授・羽入敏樹助手

（駿967-B号室，船545-A号室）



卒業研究テーマ

1. 地球環境保全計画

1-1 中国黄土高原緑化計画における窑洞（ヤオトン）住居の環境調査と近代化（国際共同研究）

1998年8月および1999年1月、日大理工・中国西安建築科技大学ヤオトン共同研究隊（代表：吉田燦教授、派遣隊長：関口克明教授）は、中国の国家プロジェクト推進地区である黄土高原・延安における洞穴建築の住環境特性を明らかにすることができました。

本年度は、これらの実態調査結果を基に改造される新型ヤオトンの改善効果を検証します。

1-2 中国内蒙古における沙漠対応型バイオビレッジ建設構想（官民学の共同研究）

2. 断熱気密化住宅の室内環境問題と住まい方

高性能住宅の普及によりクローズアップされつつある室内環境問題を検証します（温熱・空気・光・音環境など）。

3. 情報障害者の経路探索に配慮した歩行環境整備とマルチメディア技術の応用に関する研究（文部省科研費・共同研究）

情報障害者の歩行環境バリアフリー化に関する整備手法を環境工学的に支援します。

4. 『環境に優しいキャンパス』を作る

環境保全に努めるキャンパスとしてのステータスシンボル“ISO14001”の国際認証取得のためのアプローチを研究します。省エネ・環境教育の一環として。

5. コンサートホールの響きの研究

世の中には奇跡的に美しい響きがあります。音楽ホールのきらびやかな響き、カテドラルの荘厳な響き……。これらは建築空間によって生み出されます。この響きの秘密を最新のデジタル技術で探求します。

以上の研究は、建築学科関口研究室と共同で取り組んでいきます。

建築教育における実務との関わりを充実させるための新しい試みとして本年度からスタートしたNU建築フォーラムの第1回、第2回講演会が下記の日程で行われた。建築学科教室が中心となって学生、OB間の新しいアカデミックな交流の場を育てる試みは順調な滑り出しをみせた。なお、講演終了後のOBと学生を交えた懇親会を含むこの企画には櫻門建築会、工科校友会から資金援助を受けている。

NU建築フォーラム第1回講演会

平成11年11月19日(金)16:30~18:30
講師：横河 健(1972日本大学芸術学部卒,1999日本建築学会作品賞受賞)

「横河健の仕事 建築のスタンダードを問う」,出席者160名。

NU建築フォーラム第2回講演会

平成11年12月14日(火)16:30~18:30
講師：今川憲英(1969日本大学理工学部建築学科卒,1999日本建築学会業績賞受賞)

「素材と空間を結び構デザイン 固い素材から柔らかい素材まで」,出席者164名。

大学院不動産科学専攻,博士後期課程に在学中の吉澤光三君が主宰する株式会社「総研」(一級建築士事務所)が,平成11年度栃木県マロニエ建築賞奨励賞を受賞した。受賞対象作品は高齢者福祉施設「ヴィラフォーレスタ森の家」:(RC造2階建て,延べ4126㎡)で,「中庭を囲むように廊下を配置し,ゆとりある内部空間と明るい色彩計画,あわせて周囲が森という配置は,良好な高齢者福祉施設として評価される」というのが受賞の理由である。



教室ぶろむなード

大川三雄助手の原著論文「藤田綱島邸の概要と大工棟梁・今井平七について」が日本建築学会計画系論文集No.526(1999.12)に掲載された。

昨年10月に定年退職された本岡順二郎教授(平成11年10月,日本大学名誉教授発令)を囲むOB会が高輪プリンスホテルで10月23日に行われた。「研究室創設45周年記念の集い」ということで,教室の先生方も特別参加して,総勢200名を超える(正確には233名)たいへんにぎやかかつ和やかな会となつて,本岡教授の人徳をうかがわせるものであった。なお,この会の記念品代の一部は本岡教授から建築学科教室駿構賞基金(建築学専攻構造系優秀修士論文に贈られる賞)にご寄付いただけるとのこと。本岡名誉教授は新年度から大学院の講義を引き続いて担当することになっている。



昨年6月に大学を定年退職された浅香勝輔教授の最終講義が,来る2月5日(土),16時~17時30分に行われる予定。学生諸君は掲示に注意して,浅香教授のたのしい講義をぜひ聴講してください。

恒例の建築学科教室主催:関西建築研修旅行が,本年は2月12日~16日にかけて開催されます。法隆寺,東大寺から甲子園ホテル,大山崎美術館に至る名建築を,建築史研究室の先生方が案内してくれる企画です。参加者の報告に期待しましょう。

関口克明教授,吉野泰子短大助教授は,

平成11年11月9日,経団連会館において,トステム財団助成成果発表会・快適な住宅性能の探求,高気密・高断熱特集「断熱気密化住宅における室内環境問題と持続的発展可能な住環境のあり方に関する研究」と題して,講演を行った。

吉野泰子短大助教授は,吉田燦教授,関口克明教授とともに,平成11年9月27日~30日,中国西安建築科技大学,The 8th International Underground Space Conferenceにおいて,日中共同研究である「ヤオトン住居の住環境測定と持続的発展可能な試み」に関する招待講演を行い,Chairpersonを務めた。併せて「The Environmental Questionnaire Survey and the Additional Future Problems about Yao-Dong Dwellings」と題し,発表を行った。

関口克明教授,吉野泰子短大助教授は,平成11年12月2日~3日,北海道大学で開催された第23回人間・生活環境系シンポジウムにおいて,「住まい方の相違を反映した空間温度の可視化に関する研究」,「JR宮原駅西口広場における情報障害者誘導装置に関する評価実験」,「中国黄土高原ヤオトン住居の持続的発展可能な近代化に関する試み その1.ヤオトン住戸内外の温熱・空気・光・音環境の実態について」,「中国黄土高原ヤオトン住居の持続的発展可能な近代化に関する試み その2.ヤオトン住居の住環境に関するアンケート調査結果」と題して,発表を行った。

例年秋に行われている建築系3学部教員交流会(理工学部,生産工学部,工学部,短期大学部の建築系教員が一堂に会して情報交流を行うもの)が新年1月28日に工学部で行われることになった。工学部建築学科教室を幹事として企画された今回のテーマは「建築と情報教育」。教室からは斎藤公男主任,関口教授,新谷,宇於崎,橋本専任講師らが出席して,コンピュータリテラシ,建築情報処理など,教室が取り組んでいる情報教育システムの現状を報告する予定である。

駿建目次

(2000.1 Vol.27 No.4 通巻108号)

デザイン基礎、建築設計等科目に関する調査結果(第2報)

2

海外出張報告

8

日大ジョイントミーティング:

ダルムシュタットに行ってきました

12

私と作品

14

第31回建築学生海外研修旅行報告

15

卒業研究ガイド

21

教室ぶろむなード

32

『駿建』

発行者・斎藤公男:千代田区神田駿河台1-8 日本大学理工学部建築学科教室 Tel.03(3259)0724

http://www.arch.cst.nihon-u.ac.jp

平成11年度編集委員:半貫敏夫・岡田 章・大川三雄・蜂巣浩生・羽入敏樹

印刷:奥村印刷株